

かけがわ学力向上ものがたり  
—我が校のものがたり 実践編—



「茶のみやきんじろう」©掛川市

平成30年2月  
掛川市教育委員会



## 「子どもたちの未来のために」

「わたしもそう考えてたんだけど途中で変わったの。前に出て説明していい？」「先生！ちょっと難しかったけど、やり方がわかっただけできるようになった！」

教室では、子どもたちが様々な問題に対して自分の考えを伝えたり友達の考えを聞いたり解決しようと取り組んでいます。そこには、一人一人の子ども「ものがたり」があり、そのものがたりを支える先生の「ものがたり」があります。

掛川市教育委員会では、「学力」とは何かを、学校、家庭、地域で共通理解をして、どのようにしたら学力の向上が図れるか、その理念や方法等を「ものがたり」としてまとめた「かけがわ学力向上ものがたり」を策定しました。

学校では、夢に向かって自ら考え自ら判断し、心豊かにたくましく生きる子どもの育成につながるよう、日々の実践の中で、主体的・協働的に学習に取り組む子どもたちを育ててまいりました。本年度も、児童生徒の学習状況に基づいた学校独自の特色ある「我が校のものがたり」を作成し、全教職員が共通理解のもと、学力向上への積極的な授業改善を進めてきました。

この度、本年度の「我が校のものがたり」による実践の中で、特に成果が表れた代表的な実践をまとめ、一冊の本にすることができました。各学校並びに、実践報告を提出していただいた先生方におかれましては、御多用の中、多大なる御協力をいただき、誠に感謝申し上げます。子どもたちの実態に応じた素晴らしい実践の数々から、子どもたちの充実した学びの姿が想像できます。

今後も、掛川の子どもたちの学力向上の実現に向けて、学校、家庭・地域、教育委員会が連携して、子どもたちの未来のための教育活動の充実に努めてまいります。

掛川市教育委員会

## 目 次

日坂小学校 横山 まい -----	1
「進んでかかわり、表現する子」の育成	
東山口小学校 山口 真弓 -----	3
「進んで学び合う子」の育成をめざして	
西山口小学校 高村 知史 -----	5
「思いを受けとめ 伝えられる子」の育成を目指して	
上内田小学校 赤堀 益代 -----	7
参加型授業をめざして	
城北小学校 大庭 章弘 -----	9
学び合い高め合う授業を目指して	
第一小学校 石塚 将大 -----	11
ともに学び合う	
「わからない」「どうして？」が言える子「こう考えたよ」を言える子を目指して	
第二小学校 高坂 和恵 -----	13
「主体的に学ぶ児童を育てる授業」を目指して	
中央小学校 加藤 大介 -----	15
「主体的に学ぶ子」の育成をめざして	
曾我小学校 野代 理恵 -----	17
主体的・対話的で深い学びの創出～主体的に聞くことができる子をめざして～	
桜木小学校 松浦 弘承 -----	19
「学んでいく子」を育成する授業	
和田岡小学校 白松 麻友子 -----	21
みんな楽しい！分かる！できる！授業づくり	
原谷小学校 千葉 貴江 -----	23
主体的に学び合う子どもの育成	
原田小学校 池田 健 -----	25
「つながる」授業を目指して	
西郷小学校 岩水 いづみ -----	27
「考え」「動き」「できる」を増やす	
倉真小学校 法月 淳 -----	29
「おさえる・しかける・たしかめる」授業	

土方小学校	大塚 桂一郎	-----	3 1
	「学習を楽しみ、学力を付ける子ども」の花を咲かせよう		
佐東小学校	高橋 万浦	-----	3 3
	主体的に学び、「できた」「わかった」を実感できる授業		
中小学校	兼子 知也	-----	3 5
	思いや考えを深め合う授業を目指して		
大坂小学校	山本 百起	-----	3 7
	大坂っ子のよさを生かす授業づくり		
千浜小学校	山下 陽子	-----	3 9
	学び合う楽しさを実感するために		
横須賀小学校	堀田 高弘	-----	4 1
	いろいろな相手と進んでコミュニケーションを図ろうとする子の育成 ー外国語活動を通してー		
大淵小学校	伊藤 愛	-----	4 3
	伝え合い 力をつける授業を目指して		
栄川中学校	細井 道浩	-----	4 5
	一人ひとりに目を向けた学び合いの実践		
東中学校	杉山 晃弘	-----	4 7
	学び合いを実現する「質問力」		
西中学校	中山 竜彰	-----	4 9
	「学びのユニバーサルデザイン」		
桜が丘中学校	辻元 智	-----	5 1
	深い学びへの手立て		
原野谷中学校	永野 翔一	-----	5 3
	深い学びを創る～ある数学の授業を覗く～		
北中学校	宮崎 直哉	-----	5 5
	学び続ける学校を目指して		
城東中学校	小杉 栄乃	-----	5 7
	生徒が主体的に追究・表現する授業2		
大浜中学校	大杉 鏡康	-----	5 9
	子どもが中心「大浜中学びのスタイル」		
大須賀中学校	清水 侑佳	-----	6 1
	教室にいるみんなが参加する授業を目指して		

# 「進んでかかわり、表現する子」の育成

日坂小学校 横山 まい

## 本校の研修と児童の実態、自身の反省

本校の研修テーマは、「進んでかかわり、表現する子」であり、目指す子どもの姿は、①「自分の思いや考えをわかりやすく表現する姿」②「仲間と協力して、課題を解決する姿」③「考えを比べながら聴き、学び合う姿」です。栄川中学校区一貫研教育研修での共通のテーマとして取り組んでいます。本年度は、子どもたち自身に学ぶ必要感を持たせたいと考え、子どもが夢中になって「話したい。」「考えてみたい。」と感じる課題の設定と、考えを比べながら聴き学び合うことができる交流方法の工夫を重点的に研修しています。

私が担任している4年生の児童は、何事にも意欲的に取り組み進んで意見を言うことができます。しかし、自分の意見を言って終わってしまい、友達の意見と比べたり、練り合ったりすることが少ないです。そこで、以下のような手立てを打つことで、課題を解決できると考え、体育科と国語科を中心に実践してきました。

## 仮説

- (1) 主体的に学び、解決したいと思う課題の設定（体育）
- (2) 考えを比べながら聴き、学び合うための交流の工夫（国語）

## 検証

### 実践1 主体的に学び、解決したいと思う課題の設定（体育）

「ポートボール」の単元では、子どもたちの実態から技術面の向上と仲間と協力してボールをつなぎゴールを決めるという達成感やチームで運動する楽しさを感じさせたいと考えました。子どもたちは技術面の練習でパスに自信を持ち始めましたが、チームでの練習ならパスが通るけれど、試合になると相手がいることでパスが上手くいかないということに気が付きました。そこで、パスをもらうことに焦点を絞り、「どのように動けば、相手にとられずにパスがもらえるか。」



という課題を設定しました。子どもたちのつまずきや「パスをつなげられるようにしたい。」という思いから立てた課題だったので、子どもたちが主体的に学び、どのように動けばいいかを活発に意見を出し、話し合う姿が見られました。

## 実践2 考えを比べながら聴き、学び合うための交流の工夫（国語）

国語「ごんぎつね」の単元では、「ごんはどのようなきつねだろう。」という課題を設定し交流をしました。様々な

ごんの人物像を子どもたちは考えましたが、その中でも自分の中のベスト3を選び、小さな紙に書いて黒板に貼りました。「ひどいきつね」

「優しいきつね」などの意見が多い一方で、「2つの気持ちをもつきつね」「兵十のことが好きなきつね」「いろいろな気持ちをもつきつね」など少数意見もありました。その後



子どもたちは黒板に貼られた人物像を見て、「なぜごんのことをそう思ったんだろう?」と感じる子のところに行き、そう思った根拠や理由を自由に交流する時間を設けました。理由を聞きたい子のところに行くという自由交流にしたため、自分の考えと友達の意見を比べながら聴いたり、「ここからそう思ったんだね、それは考えつかなかった。」と話し合ったりしていました。全体で話し合ったあとのまとめには、「〇〇さんが言ったように、ごんには2つの気持ちがあることが分かった。」などのように、友達との交流を通して課題を解決し、自分の考えを深めて書くことができた子が見られました。

### 成果

- (1) 子どもたちのつまずきや、できるようになりたいと思うことから課題を立てることで、真剣にお互いの意見を聴き合ったり、話し合ったりすることができると感じました。また、何を話し合うのかが明確であることも、大切であると思います。今後も子どもたちが考えたい課題を設定したいです。
- (2) 子どもたちは、交流を通して自分の考え以外のことを知り、さらに自分の学びを深めることができました。課題に合った交流方法を今後も考えていきたいです。

### 課題

- (1) 子どもたちの思考が絡んでいくような、全員で同じ土台からスタートできる学習課題の設定を心がけたいです。
- (2) どのように板書するか、どの場面で、だれに発表させるかなどを考え、課題にせまることのできるような、授業の構想を考えていきたいです。

# 「進んで学び合う子」の育成をめざして

東山口小学校 山口 真弓

## 1 こんな子どもたちに

東山口小の子どもたちは、真面目に一生懸命学ぼうとする子が多く、与えられた課題に対して前向きに取り組むことができます。しかし、学習に対して受け身などところがあり、自ら学ぼうという意識が低いと感じています。そこで、本年度の研修テーマを「進んで学び合う子」とし、窓口教科「算数」を通して、仲間との関わりの中で、自分の考えを作ったり、深めたり、より良いものを求めたりする姿を願って、日々の授業に取り組んできました。

1年生の子どもたちにも、学習の基盤づくりや課題設定の工夫と学び合い活動の充実のような手立てをもって、友達と相談したり協力したりして考えを作ったり広げたりすることができる授業づくりを進めてきました。

## 2 学習の基盤づくり

学力向上に向けて一番大切なことは、学級づくりです。安心して聴（訊）き、学び合える学級づくりの基盤をつくるために、【発表名人表の取組】【寺子屋（放課後学習支援教室）】【自分の考えを持ち、表現できるようにする指導】などを積み重ねてきました。

発表名人表を活用し、聴き方・話し方のレベルアップを目指しました。1年生でも、友達の意見につなげて考えや理由を述べたり、黒板や絵を使って説明したりすることができるようになってきました。

寺子屋では、子ども一人一人に基礎的な力をつけるために、算数を中心に繰り返し復習をし、個に応じて支援をしてきました。

自分の考えを持って表現できるようにするために、個人で、又は友達と相談しながら自分の考えをつくる時間を確保し、ブロックなど具体物を使ったり絵や文で自分の考えを表現したりして、1年生なりに自分の考えを説

めざせ！はっぴょうめいじん！	
ききかた	はなしかた
かんがえをもつ	くふうして
1 くらべる	くらべる
2 はんのうする	りゆうをつけて
3 だまって	きこえるこえ
4 あいてをみて	あいてをみて

めざせ！はっぴょうめいじん！	
ききかた	はなしかた
かんがえをもつ	くふうして
1 くらべる	くらべる
2 はんのうする	りゆうをつけて
3 だまって	きこえるこえ
4 あいてをみる	あいてをみて

めざせ！はっぴょうめいじん！

3つのかずのひきざんは、まえからけいさんする。

9 - 3 = 6  
6 - 2 = 4

9 - 3 - 2 = 4

3つのかずのひきざんは、まえからけいさんする。

明することを繰り返してきました。

それらの取組を通して、1年生の子どもたちも相手意識や集団意識を持って授業に参加することができるようになってきました。

### 3 課題設定の工夫と学び合い活動の充実

「仲間と学び合って解決したい」と思えるような問いや学習課題を設定すれば、進んで学び合う子に育てることができると考え、課題設定の工夫と学び合い活動の充実の二本柱で研修を進めてきました。

導入では、ICTや具体物、掲示物などを活用し、短時間で子どもの興味や関心、疑問を持たせるような学習課題を投げ掛け、子どもの言葉や思いで学習問題をつくることを心掛けました。そうすることで、子どもの意欲を引き出し、主体的な学びにつなげることができました。また、45分の中にまとめや振り返りの時間をきちんと確保できるようになりました。

主体的で対話的な学びになるように、個の学びも大切にしながら、ペア、グループ、一斉、自由に出向くなどの形態で交流できるようになってきました。教師側が交流を設定することもあります。子どもたちが必要に応じて自然に話し合うことができるようになってきました。自分だけの考えにとどまらず、考えを広げたり、新たな発見をしたりすることにつながりました。



### 4 これからも学び合いを続けていく子どもたちに

今年度の研修を通して、子どもたちが友達と関わりながら学ぶことの楽しさを感じることができるようになってきたと思います。子どもたちがより主体的に学び合える授業にするために、これからは、特に2つのことに力を入れていきたいです。

1つめに、子どもたちが自ら話し合いたくなる、学び合いたくなるような課題設定の工夫をしたいです。子どもの興味関心や意欲、疑問やつまずきなどから生まれた学習問題となるよう、普段の授業から心掛けたいです。

2つめに、教師が明確な思いや見通しを持ち、何のための学び合いかを押さえ、より考えが深まったり、新たな気づきが生まれやすくなるような学び合いの形態や方法について考えていきたいです。ねらいを達成するために、本当にその場面でグループ活動が必要なのか、ペア活動を取り入れた方が効果的なのかななどを深く研修していきたいです。

# 「思いを受けとめ 伝えられる子」の育成を目指して

西山口小学校 高村 知史

## 授業づくり(研修の方向性)のものがたり

【平成 28 年度 学校評価結果】

項目	H28 冬結果
授業の内容が分かる。	92%
人の話を目と心を向けて聞いている。	94%
進んで自分の考えを発表したり話し合ったりしている。	80%

平成 28 年度の学校評価結果です。平成 29 年度西山口小学校では、この学校評価から見えた継続すべき成果、改革すべき課題を明確にして取り組むことにしました。

継続すべき成果は、「授業の内容が分かる」項目であり、改革すべき項目は、「自分の考えを伝える」です。子どもたちが、授業の内容が分かり、自分の考えを伝え、受けとめることができるよう、また、授業者は「身に付けさせたい力」を明確にもって授業に臨みたいと考え、今年度の研修テーマを、以下のように設定しました。

### きき合い 学び合う 授業

また、授業を展開していく中で、以下の 2 点に焦点を当てて授業研究を推進しました。

○「やってみたい！」学習問題の設定。

○きく活動を取り入れた学び合いの場の設定。

本校では、「きく」を「聴く」と「訊く（たずねる）」と捉えて、教育活動を推進しています。

## 授業づくり(実践)のものがたり

### 社会科(6年) 平和で豊かな暮らしを目指して

本時の付けたい力は、「戦後の様々な改革によって、日本が平和で民主的な社会の実現を目指していたことが分かる」である。

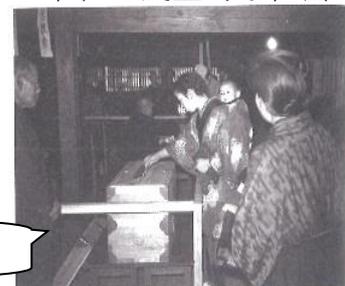
**学習課題** 「終戦直後の日本はどのような様子だったのだろう。」

導入時に投票風景の写真資料を提示し、敗戦後の改革によって、社会に変化があったこと気付かせた。

**学習問題** あっ！お母さんが投票している！

「戦後、日本が今までと変えたことはなんだろう？」

子どもが「ん？」と感じる資料を意図的に提示することで、子どもの言葉で学習問題が作られ自然と対話が生まれた。



投票する女性たち

## 国語科(3年) こまを楽しむ

本時の付けたい力は、「筆者が、「こまを楽しむ」全体を通して一番伝えたい文は、3文目の筆者の意見にあたる文であることが分かる」である。

**学習課題** 「⑧段落には何が書かれているか？」

**学習問題** 「筆者が一番伝えたい文はどれか？」

学習問題に対する答えを選択させたことで、自分の考えをもって、その理由をつくるために主体的な対話につながられた。



## 音楽科(3年) 拍のながれにのってリズムをかんじとろう

本時の付けたい力は、「反復や変化を使ってまとまりのあるリズムをつくる」である。

**学習課題** 「くり返しや変化を使ってまとまりのあるリズムを作ろう。」

**学習問題** 「どこに♪(タタ)を入れようかな。」

学習問題を♪(タタ)に焦点化したことで、自分たちでリズムを組み合わせたたり、ペアできき合ったりする姿が見られた。



## 授業づくり(今年度の結果)のものがたり

実践を積み重ねた結果、平成29年度の学校評価は以下のようになりました。

### 【平成29年度 学校評価結果】

項目	H29 冬	H28 冬	差	人数
授業の内容が分かる。	92%	92%	0	+ 0人
人の話を目と心を向けて聞いている。	96%	94%	+2%	+約10人
進んで自分の考えを発表したり話し合ったりしている。	84%	80%	+4%	+約20人

平成28年度学校評価と比較すると、「進んで自分の考えを発表したり話し合ったりしている。」、「人の話を目と心を向けて聞いている。」項目で、数値が上昇しました。これは、主体的に授業に参加することを、子どもたち自身が実感している結果です。また、子どもたちが、「きく」ことにも意欲的に取り組んできたことが数値にも表れました。今後も成果として得られた点を継続しながら、主体的に取り組んだことが、「やった!」「できた!」「なぜ!？」といった「学びの実感」につながるように、西山口小学校のものがたりを進めていきたいと考えています。



# 参加型授業をめざして

上内田小学校 赤堀 益代

## はじめに

本校の学校教育目標は「自分をひらく 未来をひらく」、重点目標は「げんきいちばんさあやろう」です。この目標の具現のために、平成28年度から「やってみたい!」「なぜ?」があふれでる授業を創り上げていこうと取り組んできました。子どもたち一人一人のやる気を導く、導入や学習問題の手立てについて研修が深まりました。今年度は、さらに「さあ やろう」「みんなでやろう」という意識を高め、仲間と学ぶことの楽しさを味わえる子の育成に力を入れたと考え、研修テーマを以下のように設定し、授業研究を進めてきました。

研修主題 「やってみたい!」「なぜ?」があふれでる授業  
～参加型授業の創造～

## 学び合おうとする「心」を耕す

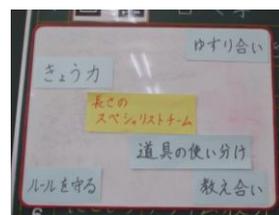
仲間と学び合う良さを意識できるように、算数や生活科の単元の初めに道徳の授業「友情・信頼」「相互理解・寛容」を設定した単元構想を考えてから取り組みました。道徳の授業では、友だちと協力するよさや大切さ、相手の気持ちを分かろうと努力しお互いに助け合おうとする心情を育てることをねらいとしました。授業の中で友だちと協力したり、教え合ったりしている姿を教師が価値づけることで、みんなで問題に向かい、関わり合いながら授業をつくっていく雰囲気ができてきました。自分の答えを出せば終わりと考えていた子どもたちが、考えができるとすぐ班の友だちに説明し始めたり、相手に分かってもらえるよう視覚的な要素を入れた説明をしたりと、徐々に自然な関わりになってきました。道徳の授業を単元の初めに位置づけたことで、低学年では「友だちは自分と違う考えをもっていて、みんなで意見を出していくと解決につながる。」や「難しい問題でも友だちと一緒に考えれば答えを見つけることができる。」と、日々の授業の中で感じる子が増えてきました。高学年では、相手が分かるまで何度も説明したり、友だちの発言に対して自分なりの反応を返したりする姿が増えました。相手を意識することで「例えば～」や「AさんとBさんの考えなら、Aさんの方が簡単で正確に出せるね。」など、友だちの意見とつなげて発表できるようになってきました。

2・3年生は、算数の授業で「筆算をする子」「説明する子」「ブロック操作をする子」など、1人ではなく数人で役割を分担して発表する機会を設けました。発表者はお互いの流れを感じて次に何をするのか考えながら発表を行うようになり、聞き手は言葉とイメージが結び付き理解が深まるようになりました。そして、活躍できる場が増えたので、子どもたちの「やってみたい」という思いを引き出すことにもつながりました。

## 参加型授業のための手立てを探る

子どもが「やってみたい！」という思いをもって問題と向き合い、自分から授業に参加する姿を目指して、その手立てを研究しました。授業に参加するうえで「話す」「聴く」はとても大事な技能です。私が担任する1年生は生育歴（7つの園から入学・家庭環境等）が違うため、一人ひとりの土台は大きく違い個人差も大きいと感じました。そのため、目指す姿を共有する必要があると思い、「話し方・聴き方名人表」や「かみうちだの学び」を使い、どのような話し方や聴き方がいいのか考える場を設けました。聞き方は、全員が発表者の方に体を向けて聴くようにしました。相手が伝えたいことを考えながら聴くことで、少しずつ「あっ、そういうことか。」「よく分からないな。」など、自分事として捉え聴ける子が増えてきました。また、話すときは聞き手を意識して、みんなが聴いているか確認してから話し始めました。発表するときには大事な言葉を書いてから説明したり、注目してほしい個所を指差しながら発表したりするようになってきました。「Aさんと似ていて～です。」「～だと思います。なぜかという、～だからです。」等、相手が聞きやすい発表方法ができるようになってきた子も出てきました。発表の型を提示しクラス全体に広めることで、話すことが苦手な子も友だちに言葉で上手に説明できるようになりました。ネームプレートの活用も効果的でした。子どもが発言するときにはネームプレートを貼り、誰の意見か見て分かるようにしました。全体の場で話すことが苦手な子は、賛成の意見や自分の考えに近い意見へネームプレートを貼りました。自分の考えの所在をはっきりさせることで授業に参加している意識が高まり、意欲が高まりました。

また、1年生の生活科「秋ランド」では『みんなで楽しく〇〇をやろう』や3年生の算数「長さ」では『長さのスペシャリストチーム』という、単元全体を通しての合言葉を用意しました。合言葉に近づくために、一人で思考する場とグループ毎の活動の場を意図的に設けました。一人で思考することで自分なりの考えをもち、グループ活動に臨むことができました。グループ活動では一人ひとりに役割を与えることで責任感が育ち、参加型授業につながってきました。



## 自己肯定感と意欲を高めるために

今年度の研修を通して、自分から授業に参加しようという意欲が高まったように感じます。日頃からペアや班活動を多く取り入れているため、困ったときや悩んだときには自然と友だちに相談する姿が見られるようになりました。また、悩んだり困ったりしている友だちを見つけると、書き方ややり方を教えてあげる子も増え、みんなで教え合いながら学習するというクラスのシステムが作られつつあります。

一人ひとりが授業の中で自分らしさを発揮し、仲間と学ぶ楽しさを味わうことで、子どもが学びの手応えを感じ、授業意欲や理解が高まると感じました。これからも、一人ひとりが自分の力を伸ばし、「やってみたい!」「わかった!」と実感できる授業を組織する手立てを探っていきたいと思います。



# 学び合い高め合う授業を目指して

城北小学校 大庭 章弘

## 「確かな学力」の育成に向けて続けよう

本校では平成25年度から「学び合い 高め合う授業づくり」を研究主題として、授業実践・授業改善に取り組んできました。また、平成27・28年度は、市の指定を受けて「確かな学力の育成」も目指し、全校体制で研究に取り組みました。

その結果、

- 全国学力学習状況調査の結果は、国語・算数ともに全国や県平均を上回る。
- 課題に対して、まじめな態度で取り組む。
- ペアやグループでの学習に意欲的に取り組む。

といった児童の姿が見られるようになりました。

今年度の初めには、さらに授業の質的向上を図ろうと、教職員は、誰にでもやさしい学校や誰もがわかる授業に力を入れたり、

- ・既習事項や体験等を用いて挑戦する子
- ・根拠を明らかにして自分の考えを表現できる子
- ・友達の考えを反応しながら受け止められる子
- ・友達の考えを聞いて学び深めることができる子
- ・理解したことや新たな疑問、次時への意欲を表現できる子



という「確かな学力」を身に付けた子ども像の具現に向けて取り組んだりすることを確認しました。学校・家庭・地域が連携するじょうほく型「新たな学びのプロセス」の継続により、未来を創り出すために必要な「かけがわ型スキル」を育みたいと考えたのです。

## じょうほく型「新たな学びのプロセス」を継続しよう

以下の9項目を継続しました。停滞・後退へつながる現状維持は排そうと心掛けました。

- ① 授業過程の再構築：国語の授業、特に問題解決のための話し合いに力を入れる。
- ② 言語活動の充実：自分の考えや思いを文章やスピーチで表現する。
- ③ 基礎的・基本的な知識・技能の習得：特に国語・算数の学習内容の定着と、学習ルールの習慣化を図る。
- ④ 読書活動の充実と学校図書館を活用した授業：読書の幅を広げ、意欲を高める。
- ⑤ 心の教育の充実：自尊感情を醸成し、よりよい人間関係づくりへつなげる。
- ⑥ 道徳教育の充実：「かけがわ道徳」をはじめ、学んだ内容を生活に生かす。
- ⑦ 健康教育・体づくり活動の充実：基本的な生活習慣への意識を高めたり、元気に活動、生活するための体力を養ったりする。
- ⑧ ユニバーサルデザインの視点を取り入れた学校づくり：誰もが安心できる学校づくりに取り組む。
- ⑨ 家庭・地域への発信と連携：家庭学習の習慣づくりや、冀北学園地域コーディネーターと連携した学習支援を行う。

## 質的向上と児童の成長を確かめよう

- ① 積極的に考えを出し合うことが自然にできるようになったり、話し合いは問題解決のための有効な方法だと認めたりできるようになりました。また、一部の学年・学級で始まったデジタル教科書やタブレットパソコンの活用は学習意欲のさらなる高まりにつながっています。授業の終わりのまとめの時間では、学習内容をみんな確認したり、次時への意欲が生まれやすくなる場面が増えています。
- ② スピーチの内容を「好きな○○」や「気になるニュース」など各学年の実態に合わせて、相手への伝え方（声の大きさや「始め」「中」「終わり」）に気を配る児童の姿も増えました。発表者への積極的な質問により内容がよく分かったり、児童同士のかかわりが深まったりしたという感想も聞かれました。
- ③ 教職員が児童の実態を把握した上で問題を作成する年3回のチャレンジテストによって、漢字や計算をはじめとする学習内容の定着。また、学習用具やノートの書き方などのルールを全校でそろえることは、落ち着いて学習する環境の土台となっています。
- ④ 国語の教科書「この本読もう」を軸に課題図書を選定したり、図書ボランティア（読み聞かせ、学校図書館の整備等）や中央図書館と連携したりすることは、貸し出し冊数の増加や貸し出し冊数の多い書名の変化に表れました。
- ⑤ 児童のよさや頑張りを教職員が認め、校長先生から授与される「かがやき賞」の継続によって、子どもの自己肯定感は高まっています。
- ⑥ 「なるほどなっとく金じろうさん」を用いることで学んだ内容がより身近になり、靴やスリッパの並べ方、掃除道具の整理整頓等にも生きるようになりました。
- ⑦ 食事、運動、睡眠など、生活習慣を大切にすることが体力や学力の向上につながるという意識が児童の中で高まりました。
- ⑧ じょうほく型スタンダードの定着により、生活や授業のしやすい環境を整えようとする教職員の意識がさらに高まりました。
- ⑨ 家庭学習の仕方や学習内容を学校と家庭とで共有したり、eライブラリアドバンスを導入したりすることで家庭学習の質の変化が感じられます。また、地域の方々に野菜の世話や昔の遊び、ミシンでの縫い物等をご支援いただいたことで、学習がより充実しました。

## さらなる質的向上を目指そう

本校のよさの特徴として、学習の定着率が高く、欠席率は低いことがあげられます。児童アンケート（H29.12）の結果、「授業がよくわかる」という回答の割合は、**91.4%**でした。じょうほく型「新たな学びのプロセス」9項目の継続により、「かけがわ型スキル」は年々、着実に育まれています。しかし、授業がよくわかるという回答の割合に低下傾向が見られることは課題です。また、「国語の授業が楽しい」と感じる児童の割合が全国・県平均よりも低くなっている（全国学力量学習状況調査 H29）ことも解決しなければなりません。

「人づくり構想かけがわ」や「さらなる学校改善に向けて」等をもとに、今後も授業改善の推進と質的向上を目指します。

## ともに学び合う

「わからない」「どうして？」が言える子「こう考えたよ」を言える子を目指して

第一小学校 石塚 将大

### はじめに

本校では、本年度より「ともに学び合う ～「わからない」「どうして？」が言える子「こう考えたよ」を言える子を目指して～」を研修テーマに据え、研修を進めてきました。

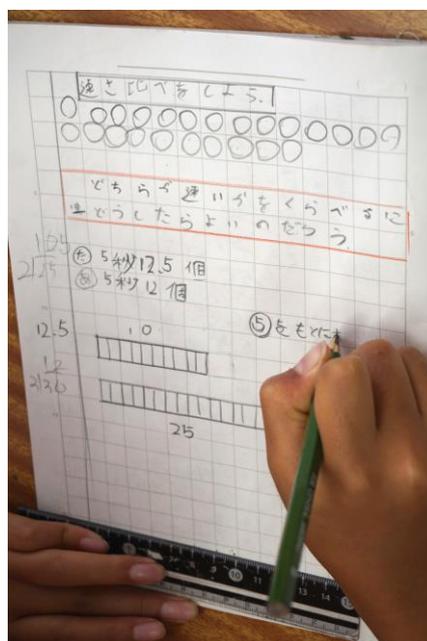
本校の児童は、課題に向かって一生懸命取り組む、真面目な児童が多い反面、主体的に学びを進めていこうとする姿勢が弱いということが課題としてあげられます。そこで、子ども同士の学び合いを通して、主体的に学ぶ姿を目指しました。その第一歩として、困ったときにそのままにしてしまうのではなく、友達に尋ねたり相談したりして、どの子ども学習に参加することができることを目指しました。そのための手立てとして、「魅力ある学習問題の成立」「学び合う場の設定と工夫」の2つを研修の視点として取り組みました。

ここでは、年間3回行った中心授業の中から、6年生の算数科「速さ」の実践について紹介します。

### 魅力ある学習問題の成立

魅力ある学習問題とは、本時のねらいに迫るものであるとともに、教師の与える学習課題から生ずる①子ども同士の考えにずれのある問題 ②多様性のある問題 ③実生活に即した問題 等であることが必要です。本時では、学習課題として、ペアでどちらが速く丸をかけるか競争させました。

始めは、単純に丸の数で比べていた子どもたちに、実は1回目と2回目では計っていた時間が違っていたことを伝えたことで、子どもの中に不平等感が生まれるとともに、なんとかしてペアと自分とで、どちらが速くかけたのかを比べたいという思いをもたせ、「どちらが速いか比べるには、どうしたらよいのだろう」という学習問題を成立させました。学び合いの中で生まれた不平等感を解消するために、本時のねらいであった時間や回数を「そろえる」考え方が、子どもたちから出されました。



## 学び合う場の設定と工夫

本校では、子どもの「わからない」「どうして？」という発言を大切に考え、困ったときには友達に尋ねることで、一人ひとりの学びを保障しようと考えています。そのため、授業の中で子ども同士が対話する機会を積極的に設け、自分の考えを持たせたり、伝え合わせたりすることで自分の考えが深まるようにしてきました。本時でも、学習問題に対して自分の考えをつくっていくときから、グループの隊形にすることによって、いつでも友達に聞くことができる環境を保障しました。

隣同士で行った丸かき競争の中から、例として「10秒で25個書けた子と、15秒で36個書けた子では、どちらが速く書けたと言えるのか」を取り上げ、焦点化しました。困ったときには相談しながら個の考えづくりをさせることで、時間や丸の数を「そろえる」ことで比べられるということにはどの子も気づき、どちらが速いのかについて、自分の考えをもつことができました。さらに、そろえた数値の違いに疑問をもち、尋ね合った子どもたちは、1秒あたりの○の数か、○1個あたりの秒数かなど、計算の意味を考えることで、速さを比べるためにはどうしたらいいのかという考えを深めていくことができました。



## より主体的な姿を目指して

本時では、扱った時間が10秒と15秒であったので、全体学習の中で子どもたちから様々な考えが出されました。どれも正しい考え方ですが、いつでも使えるように一般化を考えると、単位量にそろえることが必要になります。そのことを子どもたちに気付かせるために、「13秒と17秒だったらどうする？」と投げかけることで、「1秒あたり何個の丸がかかるか」という方法はいつでも使えると、まとめられました。しかし、ジャンプ課題として「13秒で○回と、17秒で□回では、どちらが速いと言えるだろう」と投げかけ、子どもたちに学び合わせていけば、「単位量にそろえる」必要性が子どもたちの話合いでうまれたのではないかという反省が、事後研修会で出されました。

子どもが主体的に学んでいくためには、一人一人の表れをどのように見取り、どのような支援をしていくかが大切です。今後も授業改善を積み重ね、子どもたちのより主体的な姿を目指し、適切な学習問題の成立や具体的な手立てを考えていきたいと思います。

# 「主体的に学ぶ児童を育てる授業」を目指して

第二小学校 高坂 和恵

## 1 はじめに

本校は、「主体的に学ぶ児童を育てる授業づくり」が研究主題です。授業の中で、付きたい力に即した、効果的な「交流活動」を工夫することで、児童が主体的に学ぶであろうという研究仮説のもとに、交流の目的や形態を工夫しながら積極的に交流を取り入れてきました。ここでは、児童が主体的に交流するために力を入れたことと、主体的な交流の姿が見られた2年生の国語の授業の実践を紹介します。

## 2 児童が主体的に交流するために力を入れたこと

### (1) 「交流」を成立させるために「話す・聞く」力を付ける

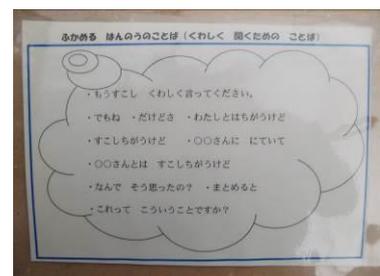
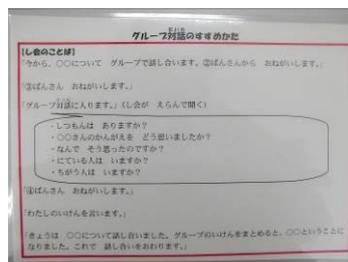
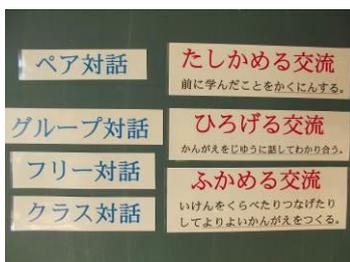
児童が交流するためには、まず話すことが基本となりますが、年度当初は交流の時間をとっても何を話してよいか分からない、どう話してよいか分からない児童が多くいました。上手に話せる児童をうまく話せない児童の隣の席になるよう配慮し、隣の児童に聞きながらでもよいので全員が話すこと、全員のペア対話ができることを確認してからクラス対話に入ることを徹底することで、みんながペア対話で話せるようになりました。

### (2) 自分の考えや思いを「書く」力を付ける

交流するためには、自分の考えがあり、それを伝えたいという思いがあることが必要です。自分の考えを直ぐに伝えられる児童もいますが、考えを整理したり書いたりする時間をもたないと、発言が得意な児童だけで授業が進んでしまいます。書けない児童には型を示して個別に指導したり、隣の友達に教えてもらったりしながら、全員が自分の考えや意見を書いてからペア対話に移ることを徹底することで書く力が付きました。

### (3) 対話の型や目的を示す

対話の型には、ペア対話、グループ対話、フリー対話、クラス対話、交流の目的には、たしかめる交流、広げる交流、深める交流があります。対話に入る前に、どの形態で、何のために交流を行うのかを黒板に示しました。また、グループ対話になると、司会が必要だったり話せない児童が生まれやすくなったりするので、全員が話せるよ

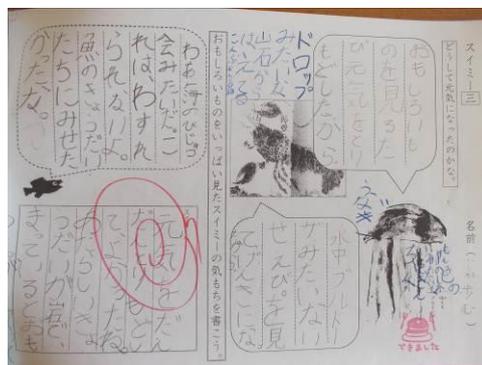


う「グループ対話の進め方カード」と「深める反応の言葉カード」を作り、グループ対話の型を教えました。ペア対話が終わると自然にグループ対話に入れる児童も増えてきました。

### 3 主体的な学びの実現に向けて学年で取り組んだ3つの授業

(1) お話を読んで感想を書こう～「スイミー」

「スイミー」の授業では、場面毎に「スイミーの気持ち」や「スイミーに言ってあげたいこと」を考えワークシートに書き込みました。他の単元でもワークシートを作り、書き方をパターン化しました。そうすることで初めは書けずに困っていた児童も、授業を重ねる毎に書けるようになり、自信をもって対話できるようになりました。



(2) なりきり音読劇をしよう～「お手紙」

「お手紙」の授業では、場面毎に人物の気持ちや様子を想像し、ワークシートに書き込みました。根拠となる表現を見つけ、「だからこんなふうを読む」ということを友達に伝え、工夫しながら音読しました。友達によかったところを褒められることが更に伝えたいという意欲につながりました。

(3) ペアにおもちゃの作り方説明書をプレゼントしよう～「しかけカードの作り方」

1年生でも分かる説明書を作るためにどんなことを工夫したらよいか考えました。教材文を読んだだけで正確にしかけカードが作れた児童は27人中2人だけでした。友達のカードは、どこを読み落としたから失敗したのかを考え伝え合うことで、説明書を書くときに大切なことを友達から対話を通して学びました。



### 4 主体的に学ぶ児童を育てる授業づくりのために

全員が聞こえる声で話すこと、友達の話最後まで聞いて反応の言葉を返すことを繰り返し指導した4月から始まり、6月からは、相手と比べて聞いたり反応や質問の言葉を返したりすること、更に10月からは、聞いて受け入れるだけではなく、「だけどさ・・・」「なんでそう思ったの？」などの反応の言葉を返すことで深める授業を目指しました。対話を入れることで、どの児童も話す必然性が生まれました。12月に行った児童アンケートでは、「授業で自分の考えを伝えている」に96%の児童が「できた」と答えました。今後は、付けたい力に即した効果的な交流活動の質を高め、新しい考えに気付いたり、みんなで考えを言い合ったりする学びの楽しさを児童が感じる授業や対話を研修していきたいと思えます。

# 「主体的に学ぶ子」の育成をめざして

中央小学校 加藤 大介

## ICT 機器の活用、新たな道を創る

本年度は、研修テーマ『「主体的に学ぶ子」の育成』を目指し、研修の重点『意欲を高める授業～ICT活用を通して～』に取り組むこととなった。前年度までに取り組んできた『伝え合い』&『3 BIG』を土台に、校舎改築に伴い ICT 化が進んでいく本校の強みを生かして研修テーマに迫っていくのだ。

ICT 機器の活用により、意欲が高まっている児童の姿を以下のように設定し、職員で共通理解をした。

- ・大画面に教材を表示→「おもしろそう！」「やってみたい！」
- ・大画面での一斉表示→「他の子の考えを知りたい！」「ぼくとはちがうな…なんですか？」
- ・小集団でのタブレット使用→「もっとわかりやすくまとめよう。」「こっちの方がわかりやすい！」「〇〇さんの考えも入れよう。」
- ・タブレットによる提出→「何回でも挑戦できる！」「もう1回やり直してみようかな。」「ぼくの考えを絶対に見てもらえるからうれしい！」

児童の具体的な姿がイメージできた。しかし、新しいチャレンジであり未知な部分も多い、ICT 機器を活用した授業づくりへの不安は大きかった…

## 児童の心が動く導入

まず、授業の導入段階でぐっと児童の心をつかむために ICT 機器が活用できるのではないかと考えた。そこで社会「食料生産を支える人々」の学習では、単元を通し導入段階で ICT 機器を活用し画面に教材を表示した。



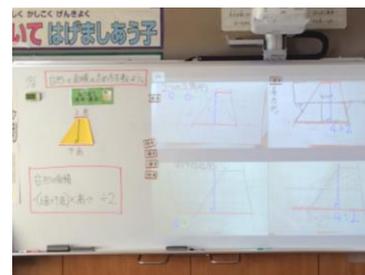
児童は魚の写真を見て「これはまぐろだよ。」「この魚はかんぱちだよ。（よく分かるなあ。）」と得意げに話したり、漁獲量の推移のグラフを見て「何でこんなに遠洋漁業は減ってしまっているの？」「前に勉強した 200 海里が関係しているんじゃないかな。」「じゃあ、沖合漁業が減っているのはなぜ？」「うーん…」と疑問を生み出したりしながら、意欲高く学習に入っていくことができた。タブレットPCを使い写真に撮った教材を拡大表示する。ICT 機器を活用した視覚化は児童の意欲を高めるために大いに有効であることが実感できた。そして、積極的に ICT 機器を活用する中で、教師自身の活用技術が少しずつ上がってきたことも実感した。

## みんなと考えたいと児童が思う展開

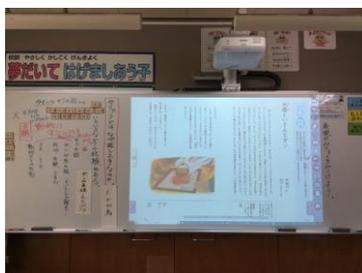
9月には校舎改築も完了し、さらに充実したICT環境のもとで授業づくりを模索することができるようになった。

算数「図形の面積」の学習は、児童から多様な考えがうまれやすい単元である。前面に、大画面で、表示ができるようになったよさをいかし、授業の展開段階で、児童の考えを一斉表示し、比較検討する中での意欲の高まりをめざした。

机間巡視の中でタブレットPCを使い、児童の考えを写真に撮る。撮ったものは即拡大表示する。導入の工夫を考えていった時に身に付けたICT活用の技術だ。児童の代表的な4タイプの考えを一斉表示したことにより、「ぼくと同じ考えは右上。」「左下は考えつかなかった。」「どうやったか、誰か説明して。」と自然に同じところや違うところを見つけ、対話もうまれていった。さらに、一斉表示したことにより「この長さはみんな使っているね。」「この長さが高さになりそう。」「÷2もみんなやっているよ。」と4つの考えから共通点を探し、台形の求積公式を導き出していく学習にもつながっていった。主体的に学びを深めていったのである。ICT活用を通して、意欲だけにとどまらず、学びの質も高めていくことができると実感した授業であった。



## どの児童にとっても学びやすいように



ICT機器を活用した実践を模索していく中で、視覚化による問題場面把握の分かりやすさ（右）や、デジタル教科書を使って本文を提示し今どの言葉について考えているかを明確にする（中央）児童と同じワークシートを拡大表示して分かりやすいまとめをする（左）等、どの児童にとっても学びやすいというユニバーサルデザインの視点から見ても、ICTは有効に活用できると実感した。同時に、教師にとっても教材や撮影したものをすぐ拡大して表示できるお手軽さ（準備の時短）や資料を印刷しなくても済む資源の節約等、ICT活用の大きな魅力も実感した。

校内研修を通して、ICT機器を活用した授業づくりへの不安は和らいでいき、活用の幅が広がるにつれ、その有効性を実感していった1年だった。来年度以降も、「主体的・対話的で深い学び」を授業改善の視点とし、児童に確かな力をつけるための手立ての1つとしてICT機器の活用を積極的に行っていきたいと思う。

# 主体的・対話的で深い学びの創出 ～主体的に聞くことができる子をめざして～

曾我小学校 野代 理恵

## 研修テーマ変更1年目

今年度は、研修テーマが変更されて1年目です。まずは研修内容を共通理解することから始まりました。テーマは3年計画で達成されるものです。初年度は以下の2点を切り口に研修を進めてきました。

1, 友達の考えを「聞きたい」、友達の考えと「比べたい」、友達と一緒に「考えてみたい」などと子どもが主体的に学ぶ**単元計画を作成する**。

2, 友達の考えを聞かないと答えが出ない、または友達の考えを聞くと自分の考えも深まるというような**学習問題を設定する**。

本校は、各研修教科は自由です。そのため、この視点が非常に重要になりました。単元計画や学習課題は授業の基本です。ところが実際は想像以上に難しいものでした。

## 単元計画・学習課題をたてるのが難しい！

5年 国語 「きいて きいて きいてみよう」(6月)

「自然教室に向けて、友達のことをよく知ろう。」という学習問題でしたが、単学級でクラス替えもないため、友達のことはよく知っています。何のためにこの学習をするのかという目的意識を上手にもたせることができませんでした。子どもたちの実態と学習指導要領と自分の思いとずれた単元計画、学習課題になってしまったことで評価もねらいまで到達できた子が少なくなってしまいました。

4年 体育 「スーパーポートボールを楽しもう」(9月)

体育では、単元計画をたてるのに時間がかかりました。その要因として、児童の実態の把握不足が挙げられます。年に数時間しかない〇〇型ゲームの実態把握は難しかったです。しかし、「ボールを持たない人はどう動けばいいのだろうか。」という学習問題は、子どもと一緒に作り出すことができました。

指導主事の先生に「解決したい」と子どもの心に火がつくクリエイティブな**学習問題**を作ってください。」と御指導を受け、研修では、その視点を加えて授業構想していくことになりました。



**自分たちのプレーを動画で  
確認し、学習問題を出しました。**

## 単元計画・学習問題とは、これだ！

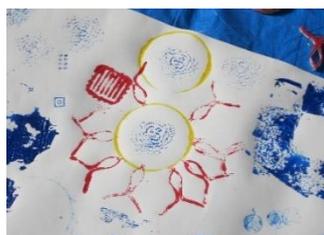
1年 図工 「うつして あそぼう」(11月)

『ぺったん』と押して写して白い紙を大変身させよう。」という学習問題は、「大変身」や「押して写して」などの言葉が議論になったが、導入のクイズや授業者の単元計画がしっかりと練られていたため、子どもたちは活動を楽しく行うことができました。

導入のクイズでは、正解発表で子どもにスタンプングさせたことにより、本時の活動が明確になりました。また、スタンプングしている子を見て、「いいな。」という言葉が子どもから聞かれ、活動への意欲が高まっている様子がありました。

発見タイムを授業の間に設けたことにより、子どもが友達の作品の良いところを発見し、取り入れて活動していました。また、対話から次の発想を生み出すことにつながりました。

鑑賞の時間に子どもに自分の作品について発表させたことで、子どもの思いが明確になりました。



さまざまな材料を使い、友達と話しながら、ぺったんしました。

子どもが主体的に学ぶ単元計画・学習課題・学習問題となり、成果のたくさんあった授業となりました。そこには、学習問題を切り口として、場の設定や、子どもの思考をより活性化する発見タイムなど学ぶべきところが多い授業でした。もちろん出来上がった作品もすばらしいものでした。

### 学習問題への意識は高まった。次は…

今年度は職員一丸となってもっと良い学習課題はないか、単元計画が学習指導要領の内容と子どもの思考の流れに沿っているか、子どもたちが「考えたい」と思う投げかけはないか、試行錯誤を繰り返した1年でした。職員室では、今日の授業はこうだったと気軽に話せる授業の相談をしやすい雰囲気があります。単元計画や学習問題を切り口に研修してきた結果、主体的に聞くことができる子が育ちました。

次年度も、子どもの姿で研修をしていき、今後も子どもの心に火がつく学習問題を考えながら、学習問題をどう解くか「教師の仕掛け」(対話・板書・場の設定)などを研修していきます。

# 「学んでいく子」を育成する授業

桜木小学校 松浦 弘承

## 〇〇していく子

本校が目指すのは「学ぶ子」ではなく、「学んでいく子」です。その違いは、主体性があるか否かにあります。変化の激しい社会にあって、重要となるのは「知識や技能」等の静的な部分ではなく、「学習力」「活用力」等の力です。ここでは、本年度研修した「学んでいく子」を育てるための授業実践の一例を紹介します。

## 学んでいく姿を生み出すしかけ

### <図画工作科の実践>

本校では、学んでいく姿を生み出すしかけを、必ず授業の中で準備をしています。特別支援学級の図画工作科「わくわく新聞ランド（造形遊び）」の授業では、新聞紙を通して、主体的に表現活動をして自らの発想を広げたり、創造的な技能を高めたりすることができるようにするために、以下のようなしかけを準備しました。

- ①第1時の授業から単元終了までの2週間、教室後方を活動スペースとして、休み時間や昼休みにも遊べるようにする。
- ②導入では教師が新聞で作った服で仮装し、新聞ランドの王様として登場する。服は児童が発見してほしい新聞紙の形（被る、丸める、ねじる等）を含ませておき、思わず真似したくなるようにする。
- ③大きさの違う新聞紙や紙袋などを用意しておくことで、新たな遊び方や、破いた紙を集める、詰めるなどの工夫が生まれるようにする。



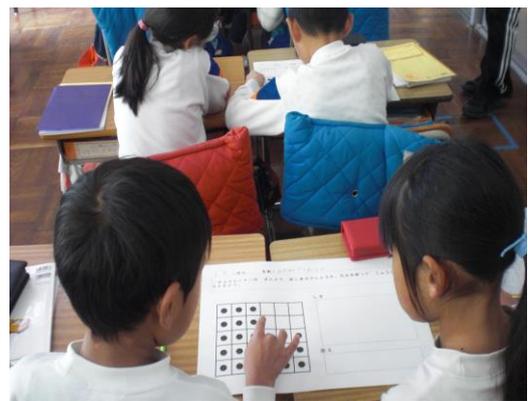
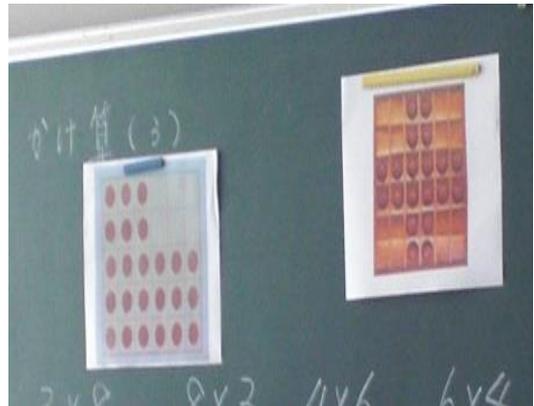
その結果、以下のやりとりのように、次々とイメージを膨らませて、主体的に表現する児童の姿を引き出すことができました。

児童A 「紙袋があるよ。いっぱい破いた紙が入るね。」  
児童B 「枕になったよ。」  
児童C 「ベッドも作ればみんなで寝られるよ。」  
教師 「寝心地はどうかね。」  
児童A・B・Cは新聞紙を重ねたり、掛け布団を作ったりする。  
児童C 「気持ちがいいね。ホテルみたいだね。」  
児童B 「ホテルだから部屋を作らないと。」 「雨も降ってきたよ。」  
そばで見ていた児童Dが破いた紙をまいて雨を表現し始める。

### <算数科の実践>

図画工作科の実践では、様々な選択肢があることや、課題が広がる余地を残しておくことが、主体性を生み出すしかけとして機能していました。2年生の算数科「かけ算」の授業でも箱に入ったチョコレートの数を求める課題を把握する場面で、様々な配置のチョコレートの箱を複数提示しました。このしかけによって、一つの課題が終わった後も、「他の箱のチョコレートの数も求めたい。」という意欲を持たせることができました。

課題解決の場面では、2人で1つワークシートを用意することで、自然と対話が生まれるようにしています。本校では学年が上がるにつれて、3人、4人とグループの人数を増やし、多面的・多角的な対話ができることを目指しています。



### そして楽しい学校へ

年度末の児童アンケートによると、「授業がよくわかる」「学校が楽しい」と答えた児童が90%以上であり、「学んでいく子」を目指した研修を始めてから年々数値が上昇しています。今後も「学んでいく子」を育成する授業を積み重ねることで、「楽しい学校」をつくっていきます。

# みんな楽しい！分かる！できる！授業づくり

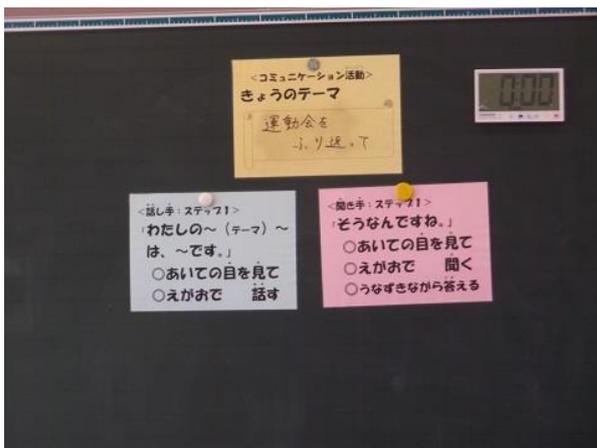
和田岡小学校 白松 麻友子

## 1 めざす子どもの姿

本校では、子ども達が主体的に学び合い、相互に関わり合う姿を目指しています。今年度は特に、子ども達が「関わり合う」ために必要なことは何かについて全職員で研修してきました。「関わり合う」ために必要なこと。それは、①隣の友だちの話を聞くこと ②分の思いを自分の言葉で伝えること この2つに自ら取り組むことができれば、関わるのが楽しく充実したものになるのではないかと考えました。

そこで毎週火曜日の朝学習の時間を「コミュニケーションタイム」と設定し、全学級で取り組みました。我が校の新しい一歩を紹介したいと思います。

## 2 コミュニケーションタイムでの様子



「今日のテーマ」「話し手」「聞き手」子ども達は板書されたカードをもとに話し合います。「今日のテーマ」は、担任が決め、子どもに提示します。季節や行事、好みなど子どもが話したテーマを選びます。子ども達は2人組になり、話し手は自分の考えを、聞き手は相づちを打ち、笑顔で聞きます。後期に入ると、理

由をつけたり、聞いたことを相手にもう一度伝えたりするなど、レベルを上げた活動に取り組みました。

「ぼくが長縄でがんばりたいことは、前の人に続けてすぐに入ることです。」「そうなんですかね。〇〇さんのがんばりたいことは、前の人に続けて入ることなんですかね。」「簡単なやりとりですが、お互いに伝え合います。「次は5人の人に話してきましょう。」「担任の指示にも、スムーズに取り組めるようになった子ども達です。



### 3 成果が見えたコミュニケーションタイム

各担任、対話を取り入れた授業に多く取り組みました。隣の友だちとペアで、小グループで、学級全体で。形式は様々ですが、子ども達は自分の思いを伝えることができるようになってきました。

「ぼくは手助けした方がいいと思う。だって、その方が早く終わるし、しょうちゃんだって助かるじゃん。」「でも、それじゃあ、本当にしょうちゃんのためにならないよ。」「やり方を教えてあげたらいいんじゃない。」ある道徳の一場面です。『主人公のためを思った行動は何か。』について、4年生ながら真剣に語り合いました。

3年生「ちいちゃんのかげおくり」の授業風景です。5場面があることで分かる作者の思いを考えました。考えをノートにまとめ、似ている意見、違う意見の友だちと交流しました。



### 4 継続することの大切さ

今年度、担任も子ども達も新鮮な気持ちでコミュニケーションタイムに取り組み、友だちの意見を聞くこと自分の思いを伝えることには、抵抗がなくなってきました。高学年に行ったアンケートでも、「楽しかった」と答えた児童は92%、「意見を言ったり聞いたりできた」が83%、「これからも続けたい」が84%という結果が得られました。多くの児童にとって、有効な取組であったことが分かります。今後は、更に内容や取り組ませ方、時間配分などを職員で吟味し、子ども達の力につながる活動にしていきたいと思えます。



# 主体的に学び合う子どもの育成

原谷小学校 千葉 貴江

本校の研究主題「主体的に学び合う子どもの育成」をふまえ、5年生の子どもたちが自主的、自発的に学び合う授業展開を心掛けた。5年生は、自分の考えを発表したい、という思いを持っている子どもが多い。また「え、どうして。」「これは〇〇すればいいのかな。」など疑問を率直につぶやき、隣の子に相談するなど周りの子と自然に関わり合う子も見られた。その一方で間違いを恐れていたたり、自分の考えに自信がもてなかつたりするため発言をためらっている子も少なくなかった。

そこで、一人一人が課題に対し自分なりの考えを作ることができるようにし、さらに意図的な交流活動を取り入れることで子ども主体の授業展開ができるのではないかと考え、次の3つに力を入れて取り組んだ。



## 1 発問と課題づくりの工夫

子どもたちの「なぜ。」「どうして。」という疑問から「どうして〇〇は～なのかな。」という学習課題に発展するように心掛けた。自動車工業の単元では、疑問に思ったことをすべて短冊に書き出してフロアーに並べ、まずは全員で全ての短冊を眺めた。似たような語句や意味などで子どもたちと一緒に分類してまとめ、課題づくりを行い



学習を進めた。新たに生まれた疑問や、教科書や資料集だけでは分からない疑問も大切に工場見学へ学びをつなげたことで「もっと知りたい。」「これも直接工場の人に聞いてみたい。」という意欲につなげることができた。

## 2 付けたい力を明確にした授業の工夫

社会の米作りの単元で、農家の工夫を考えさせる時間には、付けたい力に沿って、資料の精選と提示のタイミングを吟味した。資料を大きく拡大したり、ICTを使ったりすることで注目すべきところを焦点化し、ワークシートもそれに準じて作成するようにした。

しかし資料を提示しても、そこから何を読み取っていいかが分からず、考えが書き出せない子も見られた。そこでまず「〇〇さんは～するために〇〇という工夫を

した。」 「Aは～だが、Bは～だ。」 「AもBも～だ。」 などという型を掲示し、当てはまる言葉を考えることで思考が整理されるように配慮した。慣れてくると、型を掲示しなくても書ける子が増えた。そこで時間制限を設け、「5分間で2つ書けるといいね。」と目標を示すと、その目標に向かって集中して取り組む子が増え、さらにはその目標を超えようととことんチャレンジする姿が見られるようになった。

### 3 交流活動の工夫

社会の情報を伝える人々の単元では、ノートに書き出した自分の考えを、ペアや班、書き終わった友達同士で伝え合う活動を意図的、積極的に授業の中に取り入れた。友達の考えを聞くことで新たに気が付いたことや分かったことなどは青鉛筆で書き加えるようにし、学びの深まりを視覚的に捉えられるようにした。また、「自分一人では気が付かなかったことが、友達と交流することで気が付くことができたね。学習が深まったね。」と価値付けるような声掛けを続けた。



全体発表の場では、多くの児童が発表できるように「〇〇さんと同じで～です。」という発言も大いに認めた。子どもたちから出た話型は学級前方に掲示し、意識して使えるようにした。考えがまとまらなくても、説明できるところまで発表し、言葉に詰まったら「〇〇さんが続けて何を言いたかったか、助けてくれる人いるかな。」と教師が児童に返すことで、「助けます。」という発言も生まれた。



また聞き手側の反応の例として、「素敵な反応あいうえお」を紹介し教室前方に掲示した。特に素晴らしい反応がごく自然にできた時には黒板に星印を描いて称揚し、星印の数だけ学級目標の掲示にシールを貼ることで、目に見える形で蓄積していった。自然な反応が身に付いてきたことで、支持的学級風土の育成にもつながったと思う。友達に反応してもらったり、考えがうまくまとまっていなくても友達が発表をつないだりすることを繰り返す中で、安心感を得ることができ、発表できる児童が増えた。

#### すべての子が主体的に学び合う姿の実現のために

生活班で交流活動を続けているうちに、次第に役割が固定化される班も見受けられた。今後の課題として、グループで話し合いをする際に、どんなことを話題にすればいいか、全ての子が活躍する深い対話に関わる手立てについて研鑽を深めていきたい。

# 「つながる」授業を目指して

原田小学校 池田 健

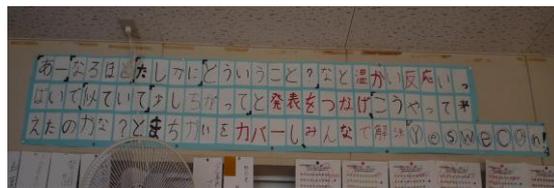
## 「つながる」とは

「教師対子ども」少人数の原田小にとっての大きな課題です。1クラスが14人という少人数の中で授業をしていると、授業を引っ張っていく児童・質問を言える児童・わからないと言える児童も、一般の学校に比べ少数になります。そうすると教師の説明の時間が増え、教師対子どもの関係ができてしまいます。

子どもが教師に伝えるのではなく、いかに子ども同士で意見をつなげ、ぶつけ合い、課題を解決していけるか。その姿を、本校では、子ども同士が「つながる」と言います。そんな子ども同士が「つながる」授業を目指し、取り組んできました。

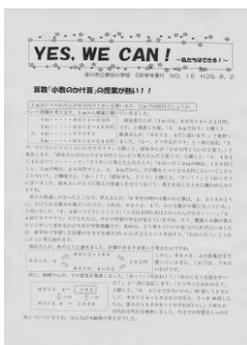
## 子どもの授業の意識を「つながる」へ

まず、子どもの授業への意識を変えるところからスタートしました。子どもにとって授業は、先生に向かって答えを発表し、最後に先生が正解を言ってくれるというイメージをもっていました。そこで、まずは、教師の授業への思い、子どもたちの授業への思いを出し合い「目指す授業像」を決めました。そして、決まった授業像が



「あー」「なるほど」「たしかに」「どういうこと？」など温かい反応いっぱい、  
「似ていて」「少しちがって」と発表をつなげ、「こうやって考えたのかな？」とまちがいをカバーし、みんなで解決「Yes, We Can！」

です。長いですが、具体的に目指す授業をイメージでき、何を意識すれば良いかがわかります。教室に掲示し、いつでもふり返ることができるようにしました。また、ステージに1回、5点満点で目指す授業像をふり返り、どんなところが成長しているか、直すポイントはどこかを明確にしていきました。次第に子どもたちが「今日は、みんなで解決できたね。」という授業が増えてきました。



目指す授業ができると、学級便りに載せました。1時間の授業の流れとともに、その中で発言した子の名前やその内容を具体的に載せました。そして、学級便りは必ず子どもの前で読みました。そうすることで、子どもたちが授業を客観的に見直すことになり、自分たちの授業が成長していることを実感できると思ったからです。

## 「つながる」授業をつくるポイント

本校の研修を通して、子ども同士が「つながる」授業にしていくためのポイントが見えてきました。

### ① 子どもが発表している時は、聞いている子どもの反応を見る。

教師が発表を聞いている子を見ていると、「ん？」と首をかしげている子、うなずきながら聞いている子、実にいろいろな子がいます。そんな子どもの表情や反応を取り上げれば、意見がどんどんつながっていきます。

### ② 間違えた意見に教師が乗っかっていく。

間違えた意見に教師が「たしかに！」と乗っかっていくことで、別の意見の子は「ちがうよ！」とより詳しく熱く説明していきます。「分数のかけ算とわり算」の学習の中で  $2/5 \times 3 = 6/5$  か  $6/15$  で分かれました。  $6/15$  と答えた子は、分母と分子に3をかけるという分配法則から考えたのです。それに教師が「なるほど！分配法則の学習から考えたのか。」と乗っかっていくと、他の意見の子が「ちがう！」「でもさ！」と言いたくてたまらない雰囲気生まれ、その後の議論が熱を帯びました。

### ③ 机間指導で「つながる」を仕組む。

机間指導の時間は、その後の展開で子どもの意見をつなげていくとても大切な場です。「小数のわり算」の学習の中で、  $1.7 \div 0.5$  のあまりは2か0.2かで意見が分かれました。机間指導の中で0.2 Lと書いている子を見つけました。その子に「なんで0.2 Lとしたの？」と聞くと「筆算をするとあまりは2なんだけど、あまりが2 Lって大きすぎる。でも、なんで0.2 Lか説明できないんだ。」「そうか、じゃあ、図に表してみたらどう？」・・・「あ、あまりは0.2 Lだ。」「これ、『筆算したらあまりが2 Lになるから。』って言ったら、ちがうって言えるね。」「うん！」というやりとりをして、この後子どもたちがつながっていくように仕組みました。この時間の授業は、「自分たちで答えを見つけた！」と子どもたちが自信を持って言った授業でした。



## つながる授業の先に

子どもたちが自分たちでつなげ解決していった授業の後には、必ずと言っていいほど、満足そうな子どもの顔がありました。次期学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」は、この「つながる」授業が大きく関わってくると思います。しかし、このつながる授業をしていくためには、子ども理解・教材理解が欠かせません。これからも、日々、子ども理解・教材研究に励んでいきたいと思ひます。

# 「考え」「動き」「できる」を増やす

西郷小学校 岩水 いづみ

## 1 ユニバーサルデザインのある学び舎で

4月に出会った子どもたちは、難しいと感じた問題は途中で考えることをあきらめる雰囲気を作られてしまうことがよくありました。また、言われたことや決められたことは素直に行うけれど、自分で判断して動き始めることは苦手だと思われました。

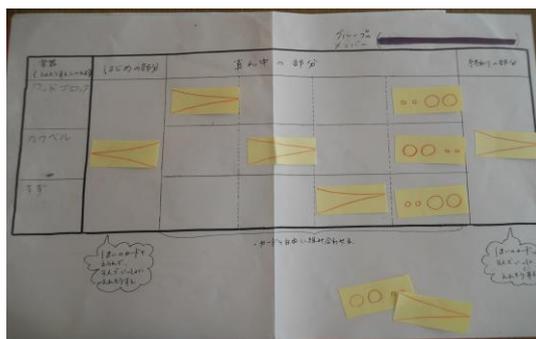
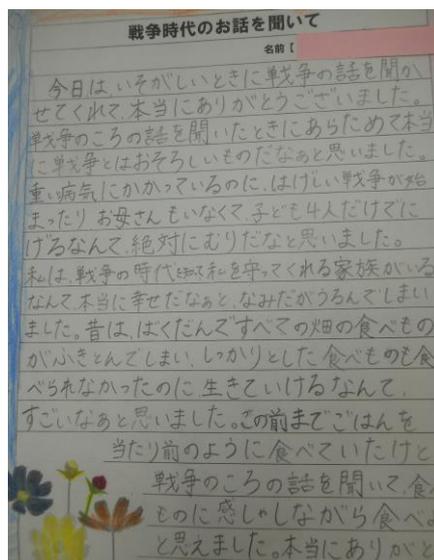
西郷小学校では、筆箱の中身、ノート指導の基本、家庭学習の約束など、学習環境の基本を全校で統一し、学年が上がっても、担任が替わっても、どの学年の子どもたちにも学習しやすい環境を整えています。まずは、学年のはじめに、その基本が乱れることのないよう、クラスの子どもたちへの声掛けを徹底しました。

## 2 授業の中のしかけ

本校の重点目標は「考え 動き できるをふやす」です。上記の学習環境を基本とした上で、本時・単元の目標に迫るために、考えたくなるようなしかけ、動きたくなるようなしかけ、そして、できる喜びを味わえるようなしかけを授業の中に施していきました。

まず、難しくても考え易くなる、考えたくなるしかけはどんなものかと探りました。『考える』ためのしかけです。4年生の国語教材『一つの花』の学習においては、教材文を読み始める前に、戦争体験者の方に、その時代の生活について、子どもたちに話し聞かせていただきました。子どもたちは、食べ物がないことがどんなに苦しいことなのか、戦火の中で生活していくことのつらさ、大事な人を失うつらさなどを感じたようです。現代の子どもたちにとって、戦争時代を生きる登場人物の気持ちを考えることは、想像しがたいものと思われれます。しかし、この活動を通して、「一つの花」の登場人物の気持ちを、より深く想像し、よりよく考えるしかけになりました。

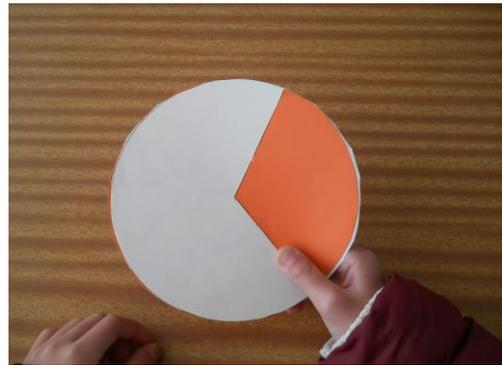
次に、『動く』ためのしかけです。音楽の創作活動においては、何度も貼ったりはがせる付箋を活用しました。創作活動をするときに、ワークシートに書いたり消した



りの動作が思考の妨げになるのではと考えました。音や声を出して試し、また違うことを試したいときは、付箋を違う箇所に移動したりはがしたりなどできるようにしました。試行錯誤しやすい状況を作ることで、活動がしやすくなり、個人での創作活動も、グループでの活動もスムーズに進みました。

また、『できる』ようになるためのしかけでは、できるようになった喜びを味わえるような活動、できるようになるための練習とはどんなものかと探りました。

4年生の国語教材『アップとルーズで伝える』の学習においては、本教材で学んだことをもとにアップの写真とルーズの写真を利用して、文章を書く活動をしました。テーマを、「3年生にキラリふれあいコンサートのことを伝えよう」としたところ、自分の体験をもとに、スムーズに文章を書くことができました。学んだことを生かして他の活動ができた、という経験をし、達成感を得る子が多くいました。また、算数の「角」の学習においては、全員に、写真のような教具を持たせました。



紙の円の半径の部分に切り込みを入れたものを2枚重ね合わせて、色々な大きさの角を作ることができます。その操作を繰り返しながら100度はこのくらい、30度はこのくらい、というように感覚的に角度を捉えられるようになることを目的としました。結果、分度器の目盛りを反対側の目盛りと読み間違えたり、大きな角を書き間違えたりする子がぐんと減りました。

### 3 授業の中でも、日常生活でも・・・

もうすぐ次学年の今では、授業中、難しくてもあれこれとことん考える姿、自分の考えを何とか誰かに説明しようと努力する姿が見られるようになりました。自ら考え、動き、できるようになる姿を授業の中で目指してきたのですが、同時に、クラスの日常生活の雰囲気も少しずつ変わっていきました。決まった仕事しかできていなかった係活動は、自分たちで考えて個性あふれる創造的な活動に変わってきました。場の空気をみて自主的に動く姿も見られるようになりました。わからないことがあると泣いてばかりいた児童は、まわりの子に聞きながら自分で判断して次の活動に移ることができるようになりました。

### 4 今後のしかけ

今後は、考えたくなるしかけ、動きたくなるしかけ、できてうれしくなるようなしかけの中に、特に、対話を取り入れたものを、多く模索していきたいと思えます。そして、友達と学び合ってできるようになっていく楽しさ、友達と協力し合っ生活をもっとよくしていく心地よさを、より感じるようになってほしいと思えます。

# 「おさえる・しかける・たしかめる」授業

倉真小学校 法月 淳

## 授業のタイムマネジメント

本校は平成26～27年度の2年間、掛川市教育委員会指定「ICT活用研究」に取り組みました。また、平成27～28年度までの2年間は、文部科学省委託事業「ICTを活用した教育推進自治体応援事業」（ICTを活用した学びの推進プロジェクト「指導力パワーアップコース」）の実証校でした。この間、本校は研究主題を「『説明する力を身につけた子』の育成～ICT機器の効果的な活用を通して～」と設定し、研究を進めてきました。

本年度は、ICT機器を活用して、「おさえる・しかける・たしかめる」の3つの授業展開を再構築することで、子どもたちの「説明する力」が向上するだろうという仮説を設定し、研究を進めました。

授業序盤の「おさえる」段階は、約5分間で、授業で付けたい力やねらいを明確にしました。

授業中盤の「しかける」段階では、子どもたちが主体的に関わり、自分の思いや考えを深めたり高めたりする学び合いの時間を約30分間確保しました。

授業終盤の「たしかめる」段階では、約10分間で、授業で学んだことを実感できる振り返りをしました。

また、本年度から「授業日記」という、家庭学習ノートを始めました。「授業日記」も、「たしかめる」段階の一環と捉え、授業で学んだことを実感できる振り返りに活用しました。

## 「おさえる」段階

4年生理科「物の体積と温度」の授業では、開始から5分間で、子どもたちの知的好奇心をくすぐる、手品のような実験を行いました。フラスコの口に塗ったシャボン玉の液が膨らむ様子を見て、子どもたちは、どうして膨らんだのかを友達と話し合い、早く試してみたいと学習意欲を高めていました。「おさえる」段階で、学ぶ意欲と授業のねらいを完全に捉えさせることができました。



「わあ、すごい！」

## 「しかける」段階

5年生総合の、情報モラルについて考える授業では、プログラミング言語ソフトを用いて、情報流出危険性を体感しました。「おさえる」段階の5分間で操作方法を伝え、子どもたちは30分間、ソフトを操作して活動を進めました。「しかける」段階が十分保障されていたので、操作に慣れ、周りの友達と相談しながら様々なシミュレーションを試すことができました。

6年生社会「幕府の政治と人々の暮らし」の授業では、「おさえる」段階で大名行列の絵を見てから、幕府が参勤交代をさせた理由を、複数の資料を手がかりにして考えました。30分間の「しかける」段階で、仲間との対話を通して、参勤交代の理由や、大名の配置の理由など、課題に迫ることができました。

## 「たしかめる」段階

2年生国語の説明文「たんぽぽのちえ」の授業では、あるテーマについて、文章中の言葉を選んで要約することを出題しました。「しかける」段階で友達と話し合い、自分たちなりにわかりやすく要約した子どもたちに、「たしかめる」段階では、違うテーマについての要約を出題しました。「しかける」段階での学びを生かしながら、子どもたちは、積極的に挑戦しました。

## 「倉真スタイル」の確立へ

本年度は「おさえる・しかける・たしかめる」授業のタイムマネジメントを全員で共有し、様々な可能性を広げることができました。来年度は、「おさえる」段階の課題設定に重点を置き、子どもたちの主体的な学びや、対話の場面を引き出せるような「倉真スタイル」授業の確立を目指します。



「ここはこうやるんだよ。」



「このことじゃないかな？」



「さっきはこうしたから…。」

# 「学習を楽しみ、学力を付ける子ども」の花を咲かせよう

土方小学校 大塚 桂一郎

## 「学習を楽しみ、学力を付ける子ども」の花を咲かせるために

平成 29 年度の教育課程編成において、「学習の意義を理解し、楽しみながら確かな学力を身に付けた子」を学びにおける目指す児童像として掲げました。楽しみながら学力を身に付けていくために、今年度は主に「交流」に視点を置いて日々の教育活動に取り組んできました。

本校では、「学習を楽しみ、学力を付ける子」を花に例え、花を咲かせるための成長過程 ①土壌づくり・種蒔き ②芽吹き・成長 ③開花 をものがたりとして展開していきました。

## 「土壌づくり・種蒔き」の期

土壌づくりでは、生徒指導部と連携しながら、一人一人が安心感をもって学校生活を送り、自らの力を思い切り発揮できる環境をつくっていきました。そのために、全学年が「土方小学校学習の約束・ルール」を活用して、教師も子どもも学習するための土壌を一緒に作り上げていきました。

種蒔きでは、4月の学級開きや授業開きで、1年間どのように学習をしていくのか、その学年における「話す・聞く・読む・書く」力はどれぐらいを目指すのか、1年後の具体的な姿を想像させました。このことを通じて「今年の勉強はどんなことをするのか」「今よりもっとできるようになりたい」という子どもの思いと、教師が考える「学習を楽しみ、学力を付ける子」のイメージを共有しました。

## 「芽吹き・成長」の期

土壌が耕され、種蒔きをし、芽が出た後の成長に必要なものは、「日光」と「水」です。子どもたちの成長を促す「日光」は『日々の授業改善』、成長のために自ら吸収する「水」は『学習スキル』となります。

日々の授業改善としては、構造的な板書づくりや ICT 機器の活用などを心掛け、全員で学んでい

## 〈学習の約束〉

「じっくり学ぶ」土方小学校の学習

【授業の始めや終わり】

- 1 次の時間の準備をしてから次の時間にする。
- 2 チャイム探をする。(準備がまだなら、黙って静かに書く。)
- 3 片手は筆で机のさじをする。

【授業中】

- 4 授業や先生の話を最後まで聞く。
- 5 黙って観察する。
- 6 授業の時の「正しい」は、一言だけ。
  - ・新しい人を見ても、大きな声で話さず静かに待つ。
- 6 自分の考えや学習してなかったことをきちんとノートに書く。
- 7 マスや線に合わせて丁寧に書く。(ノートの整理)
- 8 学習したことをノートに書く。(自分の考え・計算式など)
- 7 正しい姿勢で机に向かい合わせる。
- 8 ペン・ペン・ペンで書く。
- 9 机の隅は床、両手を机の上、机と身を正しく揃えて書く(1つ1つ空する。)
- 10 本物の紙は、順番で終業式をする。

【学習用品の整理】

- 8 学習用品は机の上には置かない。
- 9 机の上には必要なものを置く。
- 10 机の上には必要なものを置く。
- 11 机の上には必要なものを置く。
- 12 机の上には必要なものを置く。
- 13 机の上には必要なものを置く。
- 14 机の上には必要なものを置く。
- 15 机の上には必要なものを置く。
- 16 机の上には必要なものを置く。
- 17 机の上には必要なものを置く。
- 18 机の上には必要なものを置く。
- 19 机の上には必要なものを置く。
- 20 机の上には必要なものを置く。

【授業時間】

- 10 「授業準備(学習+10分)」を厳格して学習に取り組む。
- 11 授業準備(学習+10分)を厳格に準備する。
- 12 授業ができた後、自分の机に座り直す。
- 13 授業の終わり、テレビを消して帰る。
- 14 授業の終わりは必ず机の上に入れて机を片付ける。

## 〈ノート展〉



くユニバーサルデザインを重視した授業づくりに取り組みました。また、今年度は主に、自分の考えを広げ、深めていくための協働的な学びになるように、自分の考えを説明したり、友達の考えを聞いたり、グループで話し合ったりする交流活動の場を積極的に取り入れました。

学習スキルとしては、「土方小学校学びの約束・ルール」をもとに、子どもたち自身が自分を振り返ると共に、子どもたちの実態に合わせて、期ごとに指導の重点を決め、学校全体として取り組みました。さらに、週末に取り組む「土方小日記」や、年間3回行う「ノート展」などを行うことで、書く力の基礎・基本を身に付け、高めていきました。



〈土方小日記〉

## 「開花」の期

「土壌づくり・種蒔き」、「芽吹き・成長」を経て、子どもたちは次のような「開花」をしました。

「学習問題の解決に向かって、自分の考えをもとんと、真剣に考えようとする子」「自分の考えをより分かりやすく整理しながら書こうとする子」、「交流活動や発表を通して、自分の考えを伝え、友達の考えを分かろうとする子」、「黒板に図などをかきながら、自分の考えを分かりやすく伝えようとする子」など、様々な花がたくさん咲きました。



〈個の学び〉



〈交流活動〉



〈伝える力〉

それぞれの授業の中で様々な花がたくさん咲き、全校で学びに向かう意欲が高まっていきました。

これからも、土方小学校の子どもたち一人一人が「学習を楽しみ、学力を付ける子」となるよう、全職員と家庭と地域とが連携して学びづくりに取り組んでいき、更なる大輪の花を咲かせていきます。

# 主体的に学び、「できた」「わかった」を実感できる授業

佐東小学校 高橋 万浦

## 目指すは「真剣で楽しい授業」

「真剣で楽しい授業にしたい」子どもと共有した目指す授業像である。子どもたちが考える「楽しい」は、もちろんふざけて笑う楽しいではなく、できるから「楽しい」、わかるから「楽しい」、みんなで考えるから「楽しい」の「楽しい」である。本校の研修主題である『主体的に学び「できた」「わかった」を実感できる授業』を行っていくことで、子どもたちと目指す授業に迫っていける、そう考え取り組んでいった。

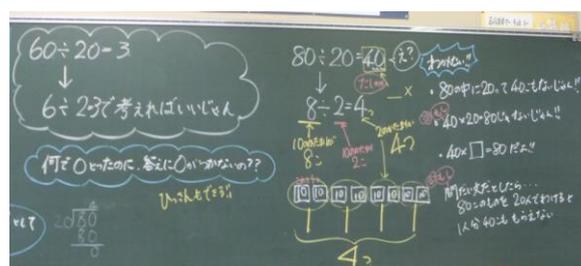
## 子どもの「？」から学習問題を作る

研修の重点「問いを焦点化するための工夫」として、導入での子どもの「？」から学習問題を作ることを心がけた。

「2けたでわるわり算」で、 $60 \div 20$ になる文章問題を扱った時、問題を読み、全員が割り算の場面だとわかりすぐに立式できた。半数くらいの児童は3という商もすぐ出せた。「商が3になる理由は、60と20の0をとって、 $6 \div 2$ にして3になるからです。」という説明だ。みんな「なるほど。」「簡単じゃん。」と納得した。では、 $80 \div 20$ の商はどうなるかと聞くと、「 $8 \div 2$ にして商は4。」とすぐに答えた。しかし、Sさんの一言でみんなの発言が止まった。

「何で、0をとったのに、答えに0がつかないの？」

計算の方法は理解しているが、なぜ0をとって考えればいいのか、割り算の意味を理解しているかと聞かれたらそうでない児童が多いのだ。Sさんの発言をきっかけに、子どもたちは悩み始めた。本時のねらいに迫るものだったのでSさんの言葉をそのまま本時の学習問題とした。



「80の中に20って4こもないじゃん。だから商は4だよ。」「 $40 \times 20$ は80にならないよ。」「この0をとるとというのは、10のかたまりを1として考えているんだよ。」「これを文章問題にすると、80このものを20人で分けると一人分は？という問題になるから、一人分は4こだよ。4こももらえないよね。」「絵で書くとさ・・・。」など、いろいろな方向から考える子がいた。ただ単に計算の方法を理解するのではなく、その意味まで考えることができた。導入での子どもの「？」を学習問題としたことで、主体的に考える姿が見られた1時間であった。



# 思いや考えを深め合う授業を目指して

中小学校 兼子 知也

## 1 「発問に絞った校内研修」

### 国語科・外国語2教科の研修

本年度の研究は、「思いや考えを深め合う授業の実現のため、重点を発問に絞って実践し、その効果を検証する。」という視点で国語の授業を中心に行った。授業研究の事前・事後研修では、「発問」に絞って協議を進めてきた。しかし、事前研修で指導案を見て授業について考えるのに、発問だけに焦点を当てて議論するのは難しかった。授業全体の流れであったり、本時の目標が適切かどうかであったり、それらに焦点がいくことが多かった。

外国語の授業では、他と積極的に関わろうとする主体性を育てていくために、「話したい」「聞きたい」という思いを引き出す在り方について授業研究を行った。

## 2 校内研修の積み重ね

研修の中で、授業の流れや目的など、視点が様々になることが多かったため、「深め合う子どもたちの姿を明確にする」ことが求められた。深め合う子どもたちの姿が明確になることで、その姿を目指すために、どんな発問をするのかと研修の視点が定まると考えた。

そこで、3部会の学びづくり部で深め合う子どもたちの姿を考え、以下の3つが目指す子どもの姿として提案された。



深化：自分の考えに別の理由付けができ、確かなものになる。

変容：相手の考えを認め、よい方向に自分の考えが変わる。

創出：自分の考えと相手の考えをもとに、新しい考えが生まれる。

授業の中で、子どもたちがどう変わるかが明確になることで、この発問でその姿が見られるかという視点で授業を考えることに繋がった。

本年度の研修では、「ねらいへ向かうための学習問題を改めて意識していくこと」「子どもの表れから補



助発問・切り返しを意識していくこと」が成果としてあげられた。一方で、子どもたちが主体的に取り組んでいくために、子どもたちから湧き上がるような必要感のある問いを作るために、教材研究が必要だということが挙げられた。

### 3 最終アクティビティを目指す

外国語の研修では、中核研修の中でも大切にしてほしいと話にあった、最終アクティビティを意識した授業作りということが研修の中で話題となった。「話したい」「聞きたい」と思える最終アクティビティを意識することで、最終アクティビティまでに「どんな活動が必要になるのか。」が決まる。それが決まることによって、授業の構成が自然とできるということがわかった。4年生の公開授業では、最終アクティビティを友達から好きな動物を聞き、ビンゴゲームを行うという活動とした。その活動がスムーズに行えるように、絵本を使った活動やフラッシュカードでの動物の言い慣れの活動を行った。単元の最終アクティビティに向かって、活動が組まれた授業であった。



また、2年生の公開授業では、高学年と違い時数が少ない学年であっても、本時の最終アクティビティを意識した授業作りが行われた。低学年も高学年同様に、最終アクティビティを何にするかを意識することが重要であるとわかった。



### 4 子どもの姿

国語科、外国語どちらの学習でも、「授業の中で教師がねらいを明確に持つこと」「そのねらいが教科のつけたい力と一致しているか」が、まず課題として出てきた。そしてねらいが達成できたかを判断するために、子どもの最後の姿を具体的にイメージしておくことが、大切であるとわかった。

今後も、思いや考えを深め合う授業を目指し、子どもたちのどんな発問をすればいいのか、どんな授業を組み立てていけばいいのかを考えていきたい。

# 大坂っ子のよさを生かす授業づくり

大坂小学校 山本 百起

## 職員全員での取り組み

私は4月に、研修主任として今年度の研修について職員と話し合った。

窓口教科が算数となって3年目。1年目は導入の工夫と振り返りの充実。2年目は交流する場の設定。そして、今年度は「友達の発表を聞いてわかった。」「みんな考えたから解決できた。」というような表れを目指し、共に学び合うための手立て（つまずきを取り上げる、つぶやきを生かす、切り返し発問、意図的な指名、学習形態の工夫、教材や教具の工夫、板書のデザインなど）を工夫し、仕掛けていくことを重点とした。

## よさを生かすための手立て

5月に、2年生の算数「長さ」の単元で提案授業を行った。次のような手立てを視点として参観してもらった。

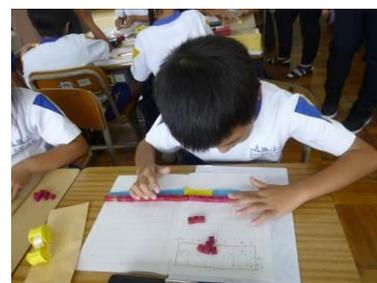
視点1 テープを動かさずに長さを比べることができるのかと仕掛けることで、任意単位の必要性に気づくことができたか。

視点2 班で話し合いながら考えることで、長さを言葉で表して比べることができたか。

視点1のテープの長さを直接比較できないように仕掛けることは、目標に迫る方法だったという意見があった。しかし、導入で直接比較するゲームを取り入れたことで、次は動かさないで比較するという必要性（机にセロハンテープで貼ってから考えさせるなど）がほしかった。それが「やってみたい」に繋がっていた。

視点2では、班で話し合いながら考えることで、一人では考えが浮かばない子も友達のやり方を試していたという良い点があった。一方、すぐに班で考えさせるのではなく、まずは自分で考えさせてから班での話し合いにいった方が、一斉での発表で「みんな同じ～を使うと」という任意単位に繋がる言葉が出てきたのではないかという見方があった。

提案授業の事後研を通して、いくつも考えられる手立てをただ仕掛ければいいのかではなく、児童の実態を踏まえて構想したり手立てを仕掛けるタイミングはいいの



か考えたりする必要があることを共通理解することができた。

## 課題解決に向けて

提案授業後、各学年部の研修がスタートし、各学級の授業を参観させてもらった。よさを生かす授業づくりを目指し、話し合い活動から始める手立て、タブレットを活用した学習、間違いを学習問題につなげる、共通点や相違点からの話し合い、既習事項を使った学習など、どの授業でも様々な手立ての工夫が見られた。課題を解決したいという思いを引き出し、子どもたちの多様な考えを導き出すことができた。授業を参観していない職員に学年部研の様子を知ることができるよう、事後研のまとめや板書写真などの資料を全員に配布した。

研修が進むにつれて、新たな課題が生まれた。導入を丁寧に行いすぎて学習問題に行くまでに時間がかかり、その分、深める場面で子どもたちの言葉で説明させたりみんなでより深く考えたいところで、教師の説明が入りすぎたりしてしまった。そこで、7月の全体研でその課題について話し合い、「課題」の共通理解を図った。

最後の公開日である指導訪問に向けて、職員が同じ課題意識をもって授業構想を行うことができた。どの職員も今年度の前半よりも、導入に掛ける時間を簡潔にすることで、みんなで学び合うための手立てが生きる授業に近づくことができたと感じる。

## 研修が生きた事例

研修の窓口教科は算数だが、他教科でも校内研修を生かした授業を行っていくことを目指した。

国語の「お手紙」や「スイミー」の物語教材では、単元全体での手立てを仕掛けてみた。本文の間に自分で考えた台詞を付け足して音読する手立てや、自分の気持ちと登場人物の気持ちの2パターンに分けて読むことができる紙芝居を作成する手立てを取り入れた。子どもたちは物語に入り込み、「早くやりたい」「できた」と言いながら毎時間の授業をととても楽しみにしていた。

一人ひとりの考えをしっかりと教師が把握し、授業の中で友達との関わりを通して「わかった」「できた」を見取れる力を付け、子どもたちも実感できる授業づくりをすることで、大坂っ子のよさを発揮させることができた。



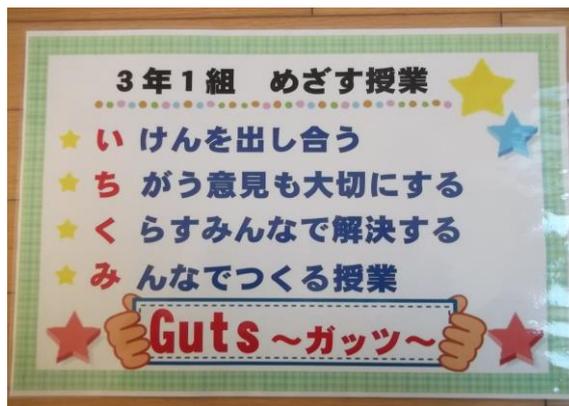
# 学び合う楽しさを実感するために

千浜小学校 山下 陽子

## 3年1組のめざす授業

3年1組には、20名の児童が在籍している。その内、家庭でフィリピンやブラジルの言葉を使用している児童が5名、ことばの教室通級児童が1名、発達障害が疑われる児童が複数名と、支援を必要とする児童が多い。

このような3年1組のどの子にも、本年度の研修テーマ「自分から考え、学び合う子」をめざして、「学び合う楽しさを実感させたい」と考え、児童と共に、めざす授業像を考えた。めざす授業像は、子どもたちが愛着を持ち、覚え易いように「いちくみ」を文頭にし、教室に掲示するようにした。



## ユニバーサルデザインを意識して

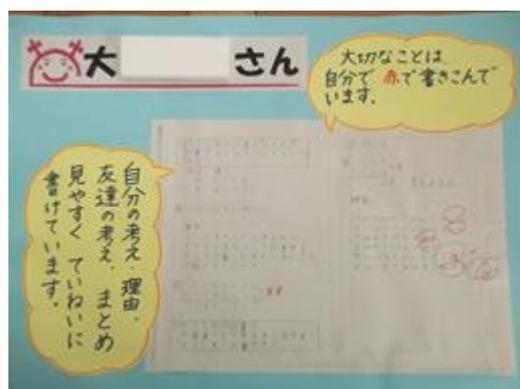
楽しい授業になるには、見通しを持って、安心して授業に参加できることが大切ではないかと考え、下のように授業の流れを一定にした。そして、本校全体で取り

- ① 前時の復習
- ② 問題・めあて
- ③ 自分の考え
- ④ 交流（グループ→全体）
- ⑤ まとめ
- ⑥ ふりかえり

組んでいる、マグネット付きのミニホワイトボードに授業の流れを記入し、黒板の隅に貼っておくようにした。また、授業中に今、どの学習をしているかが分かるように、番号の所に花の磁石を付けるようにした。板書は、本校全体でめあては赤枠、まとめは青枠で囲むようにし、どの教師の授業でも児童が安心して、見通しを持って学習に取り組めるようにした。

## 自分の考えを持ち、相手を意識した交流

学び合うには、まず、自分の考えをしっかりと持っている必要がある。問題・めあての後には、すぐには交流せず、自分の考えをノートに書く時間を確保した。自分の考えは、ことば・式・絵・図等どのような方法で書いても良いとし、良い書き方のノートを見本に見せて全体に広めた。



学び合う楽しさを実感するため、自分の考えを4人の生活班で交流したり、メンバーを換えて交流したりと、交流の機会を増やした。交流の時には、司会役を決めて話し合うようにした。どの子も司会役を経験できるように、司会は交代で行った。

交流では、相手を意識した交流になるよう（自分の考えを一方向的に言うだけにならない）よう、必ず最後



に相手の感想や質問を聞くようにした。聞く時も、ただ聞くだけではなく、聞き手の方を見ること、書いた物を見せながら話す時は、話しているところを指で指し示しながら話すことなど、相手を意識した交流をするようにした。

グループでの交流の後には、グループ内で出た意見を全体に発表する役を設けた。発表する際にも、「発表して満足」ではなく、「みんな（相手）に伝える」ことを意識させた。発表のはじめには、「言います」「はい」「前に出ます」「〇ページをみてください」等と言うこと、発表の途中では、「ここまではいいですか」等と言うことで、聞き手を意識した発表となるようにした。

そして、毎時間の最後に、必ず振り返りを書いた。また、国語で俳句の学習をした後は、五・七・五を使って振り返りの最後に「今日の一句」を入れた。

## そして、一年後

このように、3年1組は、ユニバーサルデザインを意識して、学び合う楽しさを実感できるように取り組んできた。児童は、ノートにいろいろな方法で自分の考えを表そうという気持ちが育ってきており、工夫している様子が見られる。

交流の仕方も上手になってきており、下を向いて書いた物を読むだけの子が減り、楽しそうに交流している。

振り返りの「今日の一句」は、慣れてくると、授業の感想が生き生きと表された句が多くなり、「早く振り返りを書きたい」と、書くことを楽しみにする子が増えた。

また、学習内容が難しくなる中、国語の単元末テストの平均点が、4月よりも後期の方が上がっている。

今後も、児童が意欲的に楽しく授業に取り組んでいけるよう、単元や1時間の授業の終わりの姿を明確にした授業改善を心がけていきたい。だが、自分の考えを持っていても全体の中では意見を言えない児童があるので、そういう子たちを生かせるようにしていきたい。

# いろいろな相手と進んでコミュニケーションを図ろうとする子の育成

## －外国語活動を通して－

横須賀小学校 堀田 高弘

### 《起》キーとなる「つながる力(関係形成力)」

これまで「聞く」・「話す」の段階表を活用したり、全体で話し合う前に隣の席の子どもと意見交換する時間を設けたりすることにより、子どもたちは話をしっかり聞き、自分の思いをみんなの前ではっきり話せるようになってきた。しかし、子ども同士のかかわりが浅く、なかなか子ども同士のやりとりで考えを深めていくことは難しかった。身に付けた聞く力と話す力が、子ども同士のかかわりの中でうまく機能するようにさせたいと考えた。

そこでコミュニケーション能力を、「思いを受けとったり伝えたりしながら、他者との関係をよりよくする能力」とおさえ、「受ける力(聞く力・読む力)」、「伝える力(話す力・書く力)」、「つながる力(関係形成力:やりとりを心地よいものにし、お互いを肯定的に捉えることができるようにする力)」の総称と捉えるようにし、特に「つながる力」に視点を当てることとした。そしてコミュニケーション能力の素地を養うことを目標とする「外国語活動」に着目し、その外国語活動と本校独自の時間であるキラリタイムを窓口に実践に取り組むことにした。

### 《承》進んで交流しようとする気持ちを抱かせる活動

自分たちのクラスで最も人気のあるものをみんなで調べたり、自分と好みが同じ人を探したりするなどといった活動を取り入れた。

子どもたちは、他者に目を向けるようになり交流したいという気持ちを子どもたちに喚起させることができた。また、活動の途中に評価を取り入れることにより、仲の良い子以外にも話しかけようとする姿も見られるようになった。

しかし、その場限りのかかわりで終わってしまうことが多く、そこから日常生活へかかわりが広がるまでには至ることは少なかった。そこで、自他に対して深く関心を抱くことが、交流の広がりや深まりにつながると考えた。

クラスが一番の人気は  
何かな……。尋ねてみよ  
うっと。



## 《転》自他に対する肯定的な気持ちを育む活動

好きなものや得意なこと、宝物や行きたい場所など、子ども同士子ども同士がお互いに知らないようなことを英語で紹介し合う活動を取り入れた。

「えっ！？ ○○さんは、そんなことができるんだ……。」や「へえ～、○○さんはそういう気持ちを抱いているんだ……。まったく知らなかった。」などといった感動が、もっとまわりの子のいろいろなことを知りたいという他者に対する興味を抱かせることにつながった。いろいろな子から「○○さんは、どうなの？ 教えて。」などと話しかけられ、さらに自分が話したことを相手が心から受け止めてくれたことが、自分が認められたという気持ちを抱かせることにつながり、自分に自信をもてるようになった子どもがたくさんいた。まわりのみんなが自分のことを受け入れてくれているという実感は、人間関係に対する不安を大きく和らげることになった。さらにその後の日常生活における人間関係もよりよいものとなっていった。



## 《結》やりとりを心地よいものにするための具体的な振る舞い方の取り上げ

外国語活動及びキラリタイムにおいて身に付けた聞く力と話す力を、子ども同士のかかわりの中でうまく機能させることができた。それは、一人一人の子どもの他者受容・他者理解の気持ちが強まることにより、聞いてもらえるという安心感が生まれ、一人一人の子どもが自己肯定感を抱くことにつながったからである。この自他を肯定的に捉える気持ちは「つながる力」の基盤となる最も大切なものである。

今後は、自他に対する肯定的な気持ちをさらに深めるとともに、やりとりを心地よいものにするためのよりよい具体的な振る舞い方について取り上げていくようにする。つまり、相手の様子に応じてどのように振る舞ったらよいのか追究させていく。そのために、国語科の「話す」・「聞く」領域とも連携を図っていくことも有効であろうし、仲間との交流を目標とする体育科の「体ほぐし」領域との関連性についても探っていく余地もある。どの教科、どの領域で、コミュニケーション能力の何をどのように扱っていくのかを明らかにし、全教育活動を通して系統的な指導を展開していく。

# 伝え合い 力をつける授業を目指して

大淵小学校 伊藤 愛

## 1 目指す授業像～学びの土台づくり～

4月、学級開きの次に行われるのが「授業開き」である。「みんなは、どんな授業を目指したい？」という担任からの投げかけに、子どもたちは口々に目指す授業像を語り始めた。2年生は「みんなで話し合って楽しい授業にしたい。」

「全員で発表して自分たちで作りに上げる授業がいい。」「友達が話し始めたらすぐ聞き、自分の言葉で反応するようにする。」と声が続き、自分の言葉で話し、よく聞き反応する『メリハリのある授業』という目標が定まった。

学びづくり部からは、学びの土台づくりとして、「目と耳と心で聴こう。」

「温かい反応をしよう。」が提案された。第1ステージからしっかりと聴き方の指導をすることで、これからの深い学び合いにつなげていく。

## 2 伝え合いたくなる授業への挑戦

5月、学びの土台づくりを進めながら、付けたい力を明確にした単元構想を心がけ、国語「スイミー」の授業を行った。目標を「文章の中の大事な言葉や文に線を引いたり書き抜いたりして、それをもとにスイミーの行動や気持ちを想像し、根拠を持って話したり、感想を書いたりする。」とした。自分なりの考えを持ち、根拠を持って友達と読み深めていく姿を目指した。

その結果、自分の考えを明確に持たせることで、自己の変容に気づいたり、他者との違いに気づき、伝え合いたくなる姿を引き出したりすることが分かった。しかし、相談・交流の持ち方について、2つの課題が出された。相談・交流をしない子がいる状態でよいのかという課題と、教師はどのような姿を目指してどのような形態、場面で相談・交流を持つべきかという課題である。この2つの課題について取り組んでいく。

## 3 対話したくなる学習集団の育成

まず、全員を相談・交流するようにする手立てとして、伝え合いたくなる学習集団を育てることに留意した。「温かい反応をしよう」を意識的に取り組んだ結果、自分が発言した時に、友達が一生懸命耳を傾けてくれるという安心感を得られた様子が見られた。また、3年生の授業を参観し、「初めて知った！」「おー！それいいね。」等の自分の言葉で反応する姿を学ぶと、それを取り入れ、自

分の考えと比較して同じか違うか、驚きなどを発言するような反応を目指すようになっていった。

そこで、「全員発表」の取り組みを行った。分かってはいても、発表に結びつかないでいた子たちの発言しようとする意欲を高め、全員で授業を作り上げる意識を高めることができた。

伝えやすい人間関係を作るため、1日ごとに席替えを行い、毎日国語で5分間相手の好きなものをインタビューし、聞き取る活動も行った。対話の経験や、伝え合いたい仲間を増やすことができ、伝え合う技術も高めることができた。

このように、よりよく伝え合う姿を具体で示してクラスで共有し、対話の経験や、伝え合いたい仲間を増やすことで、全員が相談・交流をする授業が増えた。

学校アンケートには、「質問するのが苦手だったけど、やってみたら自信がついてきた。」「みんなで温かい反応や質問ができてうれしかった。」「みんなが高めあう、話し合いができています。」「班で話し合ったり、友達と相談したりしていい授業ができた。」「1年間メリハリのある授業にしている。」等成長が実感として、子どもたちの言葉で語られており、対話したくなる学習集団に高まってきたことを感じた。

#### 4 ねらいを持った相談・交流

どのような姿を目指してどのような形態、場面で相談・交流を持つべきかという課題について、11月に国語「かたかなで書く言葉」の授業を行った。「言葉のまとまりを自分なりの言葉で表現し合う」という相談・交流のねらいをはっきりと持ち、授業を構想した。自分がノートに書いたかたかなをカードに書いて班で発表し合い、ホワイトボードに貼って分類する活動を行った。一人一語ずつ出し合い、「イチゴは外国からきた食べ物だよね。」「え？昔から日本にあるんじゃないの？」「あれ？イチゴといちごって書いてあるのどっちも見たことあるなあ。」と、全員が発言しながらの相談・交流となった。

他にも、ジグソー学習、グループでテーマを決めての合奏、図工の共同制作等、共同で課題を解決するような活動を設定し、その都度何をねらっているのか明確にするよう心がけた。その結果、子どもたちは活発に伝え合い、答え（よりよい解）を導き出すためによく聴く、メリハリのある授業を実現することができた。これからも、子どもたちが身を乗り出して授業に取り組めるような子ども主体の授業づくりを目指していきたい。

# 一人ひとりに目を向けた学び合いの実践

栄川中学校 細井 道浩

## 「学び合い」に見られる課題と成果

本校は、『学び合い』をテーマに研修を進めてきました。昨年度の「我が校ものがたり—実践編—」でも、その「学び合い型授業」の取組について紹介しました。その後、1年が経ち、成果と課題が明らかになってきました。

成果は、「生徒全員が授業に参加できるようになった」ことや「授業中に教え合ったり、学び合ったりする姿が多く見られるようになった」ことなどが挙げられます。一方、課題は、「生徒が深く考えたいくなるような課題が設定されていない授業がある」ことや「小集団活動が目標を達成させるための手立てになり得ていない」ことなどがあります。

今後は、明らかになってきた課題を受けて、生徒がより主体的に学び合い、深く思考する授業を構築していくために、どんなことが必要なのかを考えていかなければなりません。

## 「教え合い」ではなく「学び合い」

授業を行う上で最も強く感じることは、授業中の生徒の姿が『学び合い』ではなく、『教え合い』になってしまうことがあるということです。小集団活動をしていても、発言力のある生徒が話し合いを進め、何も発言しないまま活動を終わってしまう生徒がいることが多々あります。

こうした現状を改善するためには、1時間の授業において、目標の焦点化が重要だということを感じました。具体的には、以下の3点を意識することが必要だと考えます。

- ① 「付けたい力を明確にし、それを生徒に示す。（単元目標の提示）」
- ② 「その付けたい力に迫るように導入を工夫する。  
（＝生徒が「あれ？」「なんで？」とつぶやくようなもの）」
- ③ 「付けたい力に到達するための手立てを考える。  
（本校の場合は、ここで『学び合い』を生む課題と小集団活動の設定）」

本校は、これらを研修の柱として、生徒一人ひとりが主体的な学び・対話的な学び・深い学びを実践するために、授業改善に努めています。



【保健体育科】



【英語科】



【社会科】

ここで、国語科の実践を紹介します。

## 話し合う必要性のある課題の工夫

### ① 単元目標の提示

2年生の『徒然草』の実践を紹介します。まず、付けたい力を「読むことエ」

の「文章に表れているものの見方や考え方について、知識や体験と関連付けて自分の考えをもつこと」とし、単元の目標を「古典に描かれた世界を読み味わい、登場人物のものの見方や考え方について自分の考えをもつことができる」と設定しました。生徒には、単元のはじめに『徒然草』の魅力を紹介できるようになる、という単元の学習後の姿を伝えました。そうすることにより、生徒自身が何をどんなふうに学んでいくのかが明確になりました。

## ② 付けたい力に迫るような導入の工夫

次に、『徒然草』が鎌倉時代に兼好法師によって書かれた作品であることを知ると、ある生徒がこうつぶやきました。「鎌倉時代に書かれたものなのに、なんで今もこうして残って読まれているんだろう…。」この疑問を仲間と協力して解決していくことにこそ『学び合い』の本質があるのだと考えます。そして、この「なんで？」という導入がきっかけで、『徒然草』の学習が始まっていきました。さらに、教科書に掲載されている「仁和寺にある法師」を読み進めたところ、『徒然草』に表れる世界観が現代に通じるところがあることに気づきました。



## ③ 付けたい力に到達するための手立て

単元目標に到達するための手立てとして、「『徒然草』のいろいろな章段を読み、個々人が気に入った話の魅力を考え（個人）、その魅力を他者に伝える（小集団、全体）ことを通して、『徒然草』の魅力をもとめる活動（個人）」を取り入れました。すると、生徒たちは、自らが選んだ話の内容をもとに、『徒然草』という作品の魅力を考えることができました。

これは、生徒一人では行うことができない『学び合い』の一つの形だと思います。価値観の異なる仲間と一つの作品の魅力について語り合うことによって意見をさらに深められたと実感しています。



## 今後の研修

今後、様々な形の『学び合い』の授業を組み立てていくことにより、生徒一人ひとりの思考がより深くなり、これまで以上の「深い学び」となると考えます。また、「小集団活動において生徒が主体的に取り組むためには、目的意識や必要感のある課題設定をすることが欠かせない」ということを念頭に置いて授業を構築することが重要です。これは、本校がめざす授業の導入段階である「生徒が深く考えたいような課題の設定」に通じると考えます。そのため、「1時間に学ばせたいことの焦点化（目標・課題・まとめ・評価の一貫性）」と「目的意識や必要感のある『学び合い』の設定」の2点を研修の重点に置いて、授業改善に邁進していきたいと考えています。

本校では、さらに「学び合い型授業」を追究し、生徒の問題解決能力を育む授業を実践していき、困難に直面しても、自らの力と他者と協働することで乗り越え、激動の社会を堂々と生き抜いていける生徒を育成していきます。

# 学び合いを実現する「質問力」

東中学校 杉山 晃弘

## 相手を理解するために

中学1年生。入学から約半年が経過し、学校生活にも慣れ、新たな交友関係を築いて、楽しい時間を過ごしています。しかし、当然、まだ学級の中で十分な相互理解ができているわけではありません。学級の仲間を外見で判断し、一面的にとらえ、理解したつもりになっていたり、より広い範囲で積極的に関わろうとしなかったりして、未だ生徒同士が限定的な繋がりに過ぎないのが現状です。より広い範囲で、互いを理解し、受容する態度を育てたい。そこで、「相手を意識し、より多くの情報を引き出すための工夫をしながら、効果的に質問して聞き取ること」、「質問者として、相手の答えを注意して聞いたり、相手の反応を予測して質問をしたりして、自分の考えをまとめること」を目標として単元を構想し、「学級の仲間の知られざるすてきな一面を紹介するキャッチフレーズを考えよう」という言語活動を設定することにしました。

## 「質問力」とは

「質問する」ことは、相手や話題について意識したり、認識を深めたりする手段です。流れを意識し、関連性のある質問を重ねることで、相手からより多くの情報を引き出すことができ、その対象に対する深い理解に繋がっていきます。「質問」が、相手とのコミュニケーションを促進しているのです。そうした意味で、特に「学び合い」を重点目標としている本校の生徒にとって、「質問する力」は極めて大きい意義をもっていると言えます。

しかし、これまで「聞くこと」の指導において、この「質問」の指導が十分になされてこなかったのではないかと感じています。例えば、教科書では、「聞いた内容を確認する手段」として簡単に取り上げられてはいますが、その「質問の流れ」や、「質問の質」にまで言及した教材は存在しません。そこで、今回は様々な先行実践を参考にしながら、『質問力をつけよう』という教材を独自に考案し、実践しました。

## プロのインタビュアーから学んだこと

単元の第4時（4／7）では、「SBSラジオ情報三枚おろし」より『富士山5合目のトイレ』をテーマとしたインタビューを学習材としました。今まで学習した内容が十分盛り込まれ、質問の流れや反応、要約のしかたなどが見事で、「より多

くの情報を相手から引き出すための工夫」が非常にわかりやすく表れている学習材です。映像ではなく、あえて音声のみのラジオにすることで、表情やジェスチャーなどに惑わされることなく、「聞き手」としての技術に注目することができると思いました。さらに、個人→小集団→一斉という学習形態を、それぞれ価値あるものにするために、個人追究では、あえて視点を絞らず、気付いたことを自由に挙げさせ、小集団追究で初めて『話しやすい雰囲気づくり』、『良い質問をするための工夫』という2つの視点を提示して整理をさせながら、全体追究で「リスナー」という立場や「事前準備」のことなど、また違った角度から考えられるような展開にしました。以下は、生徒の授業プリントのまとめの記述です。



- ・プロのインタビューを聞いて、すべて計算しつくされた質問、雰囲気、テンポ…すごいなあと思った。
- ・良い質問をするためには、オープンクエスチョンを使うとよい。質問を少し工夫するだけで、場の雰囲気は変わるということがわかった。
- ・自分もこれくらい上手にできるようになりたい。アナウンサーは、自分だけではなくて、聞いている人にもわかるように質問をする技術がすごい。
- ・「沿いつつずらす」ということを心にとめておきたいです。これからテレビなどでインタビューをしっかりと聞いてみたいです。

### 「質問する」ことで得られたもの

単元の最後の授業では、「このキャッチフレーズは誰のものでしょう。」と問いかけ、生徒が「質問」によって引き出した情報をもとに考えた学級の仲間のキャッチフレーズを、全体でいくつか紹介しました。生徒たちは、その知られざる一面に驚いたり、感心したりしながら、うれしそうに提示されたキャッチフレーズを眺めていました。学級が、賑やかで暖かい雰囲気に包まれました。



この「質問力」の授業以来、グループ活動や学級での発表会などを行う際に、「質問する」ことに対してあまり抵抗がなくなったように感じます。疑問に感じたことについて、躊躇なく相手に「質問する」ことができます。「学び合い」の学校を実現するために、まずは「きき合える」環境をつくる。それが「質問力」です。

これからも、「学び合い」の授業を追究し、習得したことがより「実生活に生きる」という実感をもてる学習材を選び出せるようにしていきたいです。

# 「学びのユニバーサルデザイン」

西中学校 中山 竜彰

## 生徒の実態と本校の研修

西中学校では、体育祭や合唱祭などの行事や清掃にも一生懸命取り組み、非常に落ち着いて学習する生徒の姿が見られます。その一方で、学力の差が大きく、基本的な学力が身に付いていても、応用力につなげることができていない生徒もいます。本校の研修テーマは、「学びのユニバーサルデザイン～一人一人が学びの主役～」です。生徒の学力向上を目的に、教師個人で生徒の学力を向上させるための手立てを考え、実践しました。

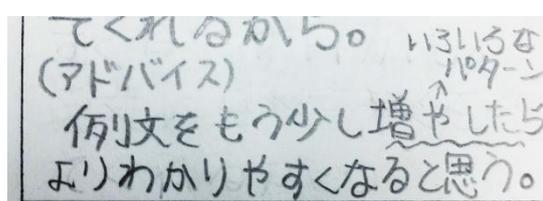
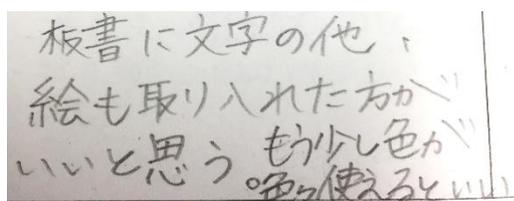
## 授業のユニバーサル化

英語の授業を楽しく充実させることや、習ったことを分かりやすくまとめた板書をするのが、学びのユニバーサルデザインにつながるのではないかと考えました。これらを実現するために、「習ったことが分かりやすくまとめられた板書」・「コミュニケーション活動の充実」の2つの柱を軸に手立てを考えました。

板書計画を構想する中で、「生徒はどのような板書を望むのか」疑問に思いました。そこで、7月に生徒にどのような板書をして欲しいか、アンケートを実施しました。生徒は「今日は何を勉強するのかが分かるといい」「授業の大事なポイントが分かるようにして欲しい」「黒板には文字だけでなく、写真なども貼って欲しい」、「色々な色を使った方がいい」、「色々なパターンの例文を板書して欲しい」と、様々な提案をしてくれました。

コミュニケーション活動を充実させるためには、単元の最後にどのような力を付けさせたいか、また、その為にはどのようなコミュニケーション活動が必要かを考えました。初めは簡単な表現を反復練習し、言い回しや文法を、使っていく中で習得させるようにしました。

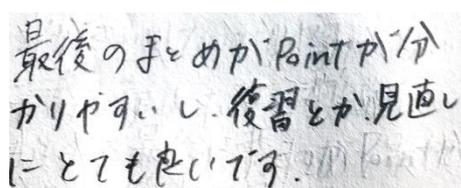
### 生徒アンケート



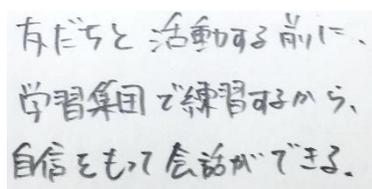
## 学びの段差をスムーズに

生徒アンケートを参考にしながら、どうしたら見やすく学びの充実につながる板書となるかを考えました。本校授業実践10項目にもある、学習課題は青囲み、学習問題は赤囲みをし、板書をする時のルールを徹底しました。また、使う色のチョークは白・赤（青：学習課題提示時のみ）の3色として、板書をできるだけシンプルにしました。使う色を限定することで、生徒が用意しなければいけないペンの本数が減り、板書をノートに写す時にペンの交換回数が減りました。さらに、本当に必要な情報だけを板書することで、生徒が板書をノートに書き写す量と時間も減りました。板書を写す時間が減った結果、本時のねらいに迫る学習問題に取り組む時間や本時の学習の振り返る時間を十分に確保できることにつながりました。

コミュニケーション活動を充実させるためには、原稿などを見ないで相手の目を見て自信をもって活動することが大切だと考えました。日常会話の中で、原稿をもって話す人はいません。実際の場面にできるだけ近づけるために、パターン練習を反復し、言い回しや文法が身に付くようにしました。全体のコミュニケーション活動をする前に、座席の隣同士や学習集団の中で活動しました。反復練習を繰り返した結果、相手の目を見て活動する姿が多く見られました。また、単元の最後に地元の名所紹介や理想の修学旅行プランを発表する活動などを用意しました。生徒は単元の中で習得した表現を駆使して、自分の考えを表現していました。



最後のまとめがPointが分かりやすいし、復習とか見直しにとっても良いです。



有らちと活動する前に、学習集団で練習してから、自信をもって会話ができる。

## 最後に

習熟度や理解度の違う全ての生徒にとって、ユニバーサル化した授業をすることは難しいですが、「焦点化」「視覚化」「個への対応」といったユニバーサルデザインを重視し、授業を実践していくことで、一人一人の学びの姿に目を向けていくことができます。だからこそ授業では生徒一人ひとりの顔や表れを考えながら授業構想をすることが、生徒の「分かった・できた」につながるのではないかと思いました。学習の障壁を全て取り除くことはできないかもしれないけれど、その障壁をできるだけスムーズにすることで、生徒の学力向上や生きる力、一人ひとりが輝く授業を考えていきます。

# 深い学びへの手立て

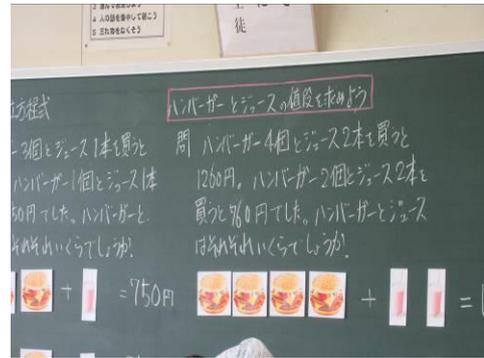
桜が丘中学校 辻元 智

## 深い学びの達成に向けて

自分から進んで考え、他者と協力しながら新たな考えを生み出す「深い学び」。これが成立するための手立ての工夫について感覚を磨くことができた1年になったと感じる。本校の校内研修では、「深まった生徒の姿の共通理解」「対話活動の充実」「発問の質の向上」「伝え合う・聴き合う集団づくり」を柱とし、全ての生徒がより主体的に思考する授業を目指して日々取り組んでいる。

## 興味深い問い

深い学びにおいて「魅力的な発問」は欠かせない。考えを深めるためには自分の考えが必要であるが、考えをもつための出発点として、生徒が「どうなるんだろう、やってみたいな」と思える発問がほしい。生徒がそのように思う発問の特徴として、①生徒にとって身近な例を使っていること②生徒にとって必要性があると感じることが挙げられる。例として、2年生の連立方程式の解き方を理解する授業で、「ハンバーガーとジュースの値段はいくらだろうか」という課題を設定し、絵を使って考えることで、生徒がより身近に課題をとらえ、興味をもって思考することができていた。また、音楽では、コンクールを間近に控えた合唱練習の授業で、「3年4組の『今』を審査しよう」という中心発問を投げかけ、生徒が審査員になったつもりで自分たちの合唱曲を審査し、合唱のレベルを上げていこうという明確な目的があったため、生徒が進んで取り組んでいた。



生徒の実態を把握し、常に生徒がどうすれば意欲的に思考するかという視点に立っておくことが大切である。

## 解決するための武器（基礎知識）を身につける

さて、生徒が興味・関心を示すような問いの工夫はとても大切だが、それだけでは不十分である。興味・関心を抱いた後、それが全ての生徒にとって「考えるに値する」ものでなくてはならない。では、「考えるに値する問い」とはどんなものだろうか。それは「これまで自分が身につけた武器でたたかうことのできる発問」とであると私は考える。

ここでいう武器とは、課題を解決するための基礎知識のことである。つまり、主体性のある深い学びの達成に向けて、活用されるべき基礎知識を身につけさせることが必要になる。

1年生の国語で、故事成語の授業づくりを行った。単元目標は、「故事成語を使ってストーリーを作ることを通して、故事成語に親しみ、より深く理解する」とした。目標達成に向け、様々な故事成語の意味を、4コマ漫画やカルタを使って覚えさせた。この活動で故事成語の基礎知識を身につけ、後のストーリーづくりの課題への取り組みに主体性が増すと考えた。カルタを何度も繰り返していくうち、故事成語を言ったら即座に意味を答える生徒が多くなった。単元の最後の時間に、覚えた故事成語を自由に選択し、試行錯誤しながら、自分の力で進んで文を作ることができた。様々な故事成語の意味（基礎知識）を覚えることで、ストーリー作りも「できるかもしれない」「やってみよう」という思いをもって取り組むことができたのではないかと感じる。作ったストーリーは班内で推敲したあと、全体で発表をした。



## 対話活動の充実

基礎知識を身につけさせ、それらを活用できる魅力的な発問を仕掛けて自分の考えをもたせることができれば、深い学びの準備は整ったといえる。最後に大切なのは、対話活動の充実である。自分の考えと相手の考えを比較しながら、考えを広げたり、まとめたり、あるいは絞っていったりする活動を単元計画に組み込む。

課題としては、自分の考えを紹介するのみになっていたり、分かっている子がただ教えるだけになっていたりとことである。また、対話の人数設定によっては、活動に参加できない生徒が見られた。対話活動はあくまで深め合うための「手段」である。人数や時間、タイミング、また、目標達成のために果たして本当に必要な活動なのかなど、対話活動のあり方については来年度も引きつづき研修を深めていく必要があると感じる。

授業作りにおいてだけでなく大切なことは、生徒がどういう姿になっていけばよいかという最終のゴールを決め、そこまでの道筋を計画していくことにあると感じる。来年度は3カ年研究のしめくくりとして、全ての教員が生徒の姿で授業力の向上を実感できるようにしていきたい。



### 〈 対話の目的 〉

#### 個々の考えを

深める 広げる 類型化する  
絞る 明らかにする 深める  
整理する 変化させる  
新たな考えを加える  
違いを見つける

## 深い学びを創る ～ある数学の授業を覗く～

原野谷中学校 永野 翔一

A「先生、星形 $n$ 角形の角の和がわかりました！」

B「Aさん、やってきたの！？どうなった？」

A「まずね、星形五角形は・・・」

図形の授業に入り、授業後や休み時間に、黒板を使って生徒同士で熱く議論する姿。初めは先生に話しかけてきたはずが、気付くと生徒だけで話が盛り上がっている。3人、4人と増えていく。きらきらした表情で数学を語る生徒を見ていると、こちらも思わず笑みがこみ上げてくる。そんな姿をみていると、口をはさみたくなくなってしまうが、そこはぐっところえる・・・話が無事終わったのを見て一言。「これって、1点とばしの星形だよな？2点とばし、3点とばしになると、どうなるの？」

机に向かって走って行く2名の生徒。「明日はどんな報告があるのかな」そう楽しみにしながら、私は生徒の思いに負けない授業を考えています。2年生数学科の授業で見られた生徒のものがたりを紹介しながら、本校の取組をお伝えします。

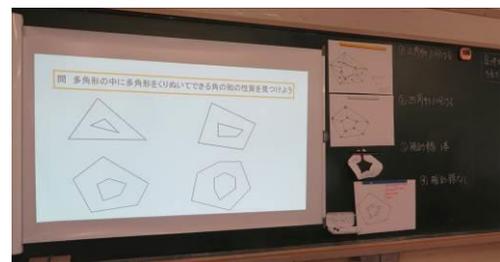
### 全教員で支える！ ～授業づくりは現場から～

「この課題はCさんには難しすぎるから、手立てが必要だよな？」「この方法だとDさんにとっては易しすぎて力を出し切れないから、こんな方法が有効じゃないかな？」

原野谷中では、多くの教科で一人しか教員がいません。そのため、研修等で一つの授業を考えると職員全員で教科を超えて議論します。原野谷中の研修や職員室では、学年を超えて生徒の名前がとび交います。職員全員が、117人の生徒全員を授業や学級でよく見て、よく知っているのです。原野谷中では、生徒一人ひとりを職員全員で見て、会話し、情報を交換し、生徒にあった授業を考えていくことを大切にしています。

### 先生、早く授業やりましょう！ ～生徒が熱中できる授業課題の工夫～

生徒が黙々とノートに向かい、問題と戦っている様子。班の形にしたときに、ホワイトボードやペンを取り合う姿。自分の考えがわかってもらえないときに、手をかえ品をかえ、友だちに伝えようとしている姿。そのような様子とき、生徒は「解きたい」と思い、解けたときには「伝えたい」という気持ちになっていると思います。「五角形の中に五角形をくりぬいてできる角の和を求める」という前時の授業では、補助線の引き方によって、多様に考えることができる課題であったため、生徒は課題と戦い、解けてからも、「他にも解き方がないだろうか？」と自分との勝負に没頭していました。そうして見つけた自分の考えを、

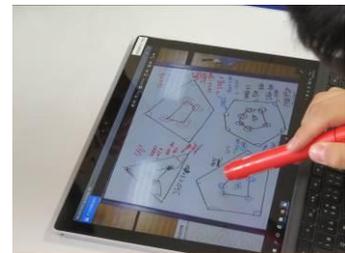


班員に図を示しながらなんとか伝えようとしている様子は、まさに、思考力・判断力・表現力の向上につながる姿でした。そして本時・・・「先生、今日は昨日の続きですよね！早くやりましょう！」と、授業前から数学好きのFさんは燃えていました。

多様な考え方ができる課題、単発ではなく次につながる課題、日常生活との関わり、予想と異なる結果から生まれる疑問・・・原野谷中職員は、生徒が熱中できる課題になるよう、教科間で情報を交換し、各教科での研修を深めていきます。

## 全員が活躍する深い学び！ ～ICT活用と授業形態の工夫～

「五角形ではなく多角形の中に多角形をくりぬいてできる角の和には、どんな秘密があるのかな？」本時は、前時の課題を「五角形」から「多角形」に変え、一般化を狙ってスタートしました。そして、その理由を説明できることを目的とし、そのための手立てとしてジグソー法を用いました。「三角形の内角の和は $180^\circ$ で、補助線を引くと三角形8個に分けられるから・・・」エキスパート活動では数学が苦手なCさんも、みんなの説明を聞いた後に、説明に挑戦していました。その後のジグソー活動でも、図を用いて、順序立てて説明することができました。エキスパート活動でつくったホワイトボードのまとめをタブレットで撮影し、共有フォルダに保存することで、その後の活動でもすべての班がすべてのエキスパートグループのホワイトボードを確認しながら説明することができました。そして、一般化を考えるときにも、自由に画像を見ながら考えていました。ICTを説明に使えば表現力の向上に、考えを何度も確認したり比較したりすることで、思考力・判断力の向上につながります。効果的なICT活用は、生徒の言語活動、深い学びを引き出します。



## これぞ原野谷中の原点！ ～ベースにはあたたかさがある～

「これって、内側の多角形と外側の多角形を違う形にしたらどうなるの？」授業終盤は、休み時間に数学を語るAさんのこの疑問で動きました。「なるほど！m角形とn角形で考えればいいんだ！」Bさんが続きます。「m角形の中にn角形をくりぬいてできる角の和はどうなるのか」クラス全体が次なる課題に向けて出発したのです。

このクラスに、自分だけ課題を解決して満足する生徒はいません。「Cさんわかった？説明チャレンジしてみよう」Cさんの挑戦を後押ししたのも数学が得意な班員でした。AさんやBさんの発言や活動を「何それ！すごい！」と認めてくれる雰囲気があります。原野谷中では生徒が「かしこく・りりしく・たくましく」成長することを目指しています。しかし、どんな活動の中にも、ベースには原野谷中生の「あたたかさ」があります。あたたかな学校であることを自信と誇りに、今日も教員、生徒が一丸となって、原野谷中の深い学びを創っていきます。



# 学び続ける学校を目指して

北中学校 宮崎 直哉

## “北中らしい成長”を目指して

「生徒が継続して何かを学んだり、調べたりして考えを深めていけるようにしたい。そのためには生徒が主役になり、教師が継続して生徒の学びをサポートできるようにしたい。」今年度の研修を考える中で、始めに考えたことです。一つ一つの断片的な知識を切り売りしていくのではなく、何か筋の通った学びを日々の授業で展開していくために、私たち教師も学び続け成長し続けるような存在でありたい、可能ならば生徒と教師が共に学んでいくような1年間にしたいと思いました。そのためにはドリル学習のような授業を行っていても実現は難しいだろうし、流行を追うような研修を行うことも本校の実態にそぐわないと思いました。本校の穏やかな生徒と若々しい教師集団に合った、学ぶことの本質に迫るようなテーマが欲しいと思いました。そこで思いついたものが「学校教育の中でその教科を学ぶ意義」を考えることでした。「なぜその教科を学ぶのか」このテーマについて考えることで各教科の背景にある大切な概念や生徒に身に付けてほしい知識・考え方などを教師自身が考えるようになると思いました。また、そのことが日々の授業を組み立てる際に生きてきたら授業は変わると考えました。

しかし、これだけでは生徒が主役となって学ぶことは難しいため、もう一つのテーマを付け加えました。それが「真に意味のある小集団学習」を目指すというものです。各教科で付けたい力を授業の中で身に付けるために、学んだ内容を確認したり考えを練り合ったりすることができれば、少しずつ授業の主役は生徒になっていくはずだからです。このような考えから「真に意味のある小集団学習」、「“なぜその教科を学ぶのか”に答え得る教師」という二つの柱で今年度の校内研修を進めていくことにしました。

## 生徒と共に学ぶ

教師が授業をデザインしながらも、その中で生徒が意思や意見を表したり、生徒自身が選択したりする場面を多く取り入れていくことで授業は少しずつですが、確実に変わり始めました。ある先生は国語の授業で文章を全員で読んだ後に「この文の中から気になることや追究したいことは何か」と生徒に問いかけました。生徒は小集団で自分が追究したい課題を出し合い、それを全体で共有し、今後追究していく課題とする、という活動を行いました。おそらく教師一人では、あのような多様な面白みに富んだ課題は出なかったことでしょう。生徒自身が課題を見つけ、教師のサポートを得ながら修正したからこそ、魅力ある学習課題が多く生まれました。

また、ある先生は社会科の経済の授業で「模擬出店を行う」という活動を行いました。これは小集団ごとに立地やコンセプトなどを考えた上でコンビニエンスストアを出店し、さらに目玉となる商品を開発し最終的にはプレゼンテーションするというものです。周辺環境やお店の収益など複合的な内容が絡み合い、ドリル学習では得られない経済活動の様々な内容を生徒は活動を通して学びました。何よりも生徒の発想の豊かさや考えの深さに私たち教師の方が学ぶことが多くありました。

さらに、先生方が作るワークシートにも変化が現れました。知識を確認するためのドリル形式の問題や解説を並べたものから、生徒が思考を整理するためのメモ用紙やフローチャートのようなものになっていったのです。

## “行き詰まり感”という成果

「真に意味のある小集団活動」を目指していくことで、生徒たちは考えを練り合い、深めていくことに慣れてきました。また、先生方も授業の多くの場面で生徒の考えを取り入れながら進めていくスタイルに慣れていくように見えました。しかし、その一方で自分の持つ手法がだいぶ行き詰まっていると感じている意見も聞かれるようになりました。もうすでに新しい方法を試しているが、何か次の段階へのヒントが欲しいと感じている先生が増えてきたのです。この悩みは先生方が本当に意味のある学びの時間を生徒と共に作り上げようと挑戦し続けた成果です。また各教科を学ぶ意義を考える中で、自分の教科指導の方針を変えたいと思い、専門雑誌を読んだり、教科に関する情報を広く集めたりする先生も現れ始めました。ある先生は「世の中のこと、他教科のことをもっと知りたいと思うようになりました。また、大学で学んだことを再び追究したくなり、少し勉強しています。」とコメントしています。自分の中にモヤモヤとした疑問や課題が出てきて教師自身が学び始めたことも成果の一つではあるかもしれません。

## 「個人の知」を「組織の知」に

学ぶことに終わりが無いように、授業づくりの工夫にも終わりがありません。各教科の先生個人の取組を今後、共有していくことで、今の悩みを解決していく方針や糸口が見つかるかもしれません。教科を学ぶ意義を考えるということについても先生方が個人で考えている教科観を共有できたら、深みが出てくるかもしれません。今年度は学校全体として同じ方向を向きつつも、個人の知の積み重ねが主だったので、来年度以降はこれを学校や組織の知としていくことができれば、“北中らしい”生徒と教師でじっくりと作り上げる授業が展開されるはずです。



# 生徒が主体的に追究・表現する授業 2

城東中学校 小杉栄乃

## 校内研修の柱

本年度の校内研修のテーマは、昨年度同様「生徒が主体的に追究・表現する授業」です。昨年度は「生徒が主体的に追究・表現するための手立てをうつ」ことを共通実践項目とし、様々な手立てを共有しました。本年度は、共有した手立ての中から、「小集団活動の充実」と「学習問題の工夫」に重点をおいて授業改善に取り組みました。

## 小集団活動の充実

### 1 学習班の設定

本年度新たな取組として、全ての学級において生活班をベースにした3～4人の学習班を設定しました。5～6人の班よりも、生徒一人一人の活躍の場が増え、意見を発表する機会を増やすことにつながりました。全教科で「小集団活動」を取り入れたことで、生徒は小集団での学び合いに慣れ、活発な意見交換が行われるようになりました。個人で意見をあまりもてない生徒も、小集団活動を取り入れることで、様々な角度から考えることができるようになりました。

### 2 生徒がかかわりながら学び合うための手立ての工夫

保健体育科「マット運動」では、タブレット端末を使った授業を行いました。この単元の目標は「組み合わせた技を美しく行うことができる」でした。グループごと演技会に向け、自分の技を磨く活動を行いました。マット運動が得意な生徒も、そうではない生徒もいる3人グループで、タブレットや実技書を活用しながら、学級で決めた「美しい技」の定義に近づけるように練習しました。

生徒はタブレットでお互いの演技を撮影し合い、その後付箋紙を用いて、仲間の良さや改善点をアドバイスし合う活動を行いました。タブレットで撮影した動画は、静止したり、コマ送りにしたりしてじっくりと分析できたので、仲間の演技に対して具体的で説得力のあるアドバイスをすることにつながりました。

マット運動  
授業の様子



### 3 考えるための資料や視点の提示

美術科では、紙粘土の立体制作で「和菓子の作品を鑑賞しよう」の授業を行いました。先輩の作品を複数鑑賞し、班でいくつかの作品の良さについて考えました。その際、「色」と「形」について考えるという視点を提示しました。生徒は作品の関係する季節と色の関係に気づいたり、形の作り方のバリエーションに気づいたりすることができました。考えるための具体物があり、考えるための視点が複数あったことで、生徒は自分の考えをもちやすくなり、異なる角度から考えた仲間の意見を聞いて新たな発見をすることができました。

## 学 習 問 題 の 工 夫

生徒が「かかわりながら学び合うことができる学習問題」を考えることは教師の大きな課題でした。解答が一つしかないなど多様性がなく、どの生徒の考えにもほとんど差がない学習問題には、小集団活動での学び合いの効果はあまり期待できません。理科の授業実践では、学習課題「植物園を作ろう！」に「どのような特徴で仲間分けをすることができるだろう」という学習問題をたてました。生徒は花の有無、色、季節などの情報だけでなく、既習事項の被子植物や裸子植物の特徴を踏まえて、植物園の植物配置を考えました。最初に花の有無や色で分けているだけだった生徒も、班員の考えや他の班の仲間分けの理由を聞いて、被子植物や裸子植物の特徴に気づき、仲間分けを変えていく姿が見られました。最後に分類表を個人で作る作業を行いました。十分に友達と話し合い、多様な特徴に気づき理解したことで、スムーズに問題に向かうことができました。このように、生徒同士のかかわりに必然性があり、活動の目的が明確であることが学習問題を設定する際に大切だと考えました。

## 今 後 に 向 け て

校内研修を通して、「生徒が主体的に追究・表現する授業」のために、小集団活動を充実させ、学習問題を工夫することが有効であることが実証されました。しかし、小集団活動が、教え合いになっていて、学び合いにならないことや、活動に参加することが難しい支援を必要としている生徒に対してどう教師が支援していくのかなど、課題が残ります。来年度にむけて、「個の学びにつなげること」「生徒一人一人の実態把握をすること」「指導と評価の一体化」など、一人一人の学ぶ力を高めていけるような研修を行いたいと考えています。

# 子どもが中心「大浜中学びのスタイル」

大浜中学校 大杉 鏡康

## 起 … 主体的・対話的で深い学びとは？

新学習指導要領が告示され、研修主任として、「『主体的・対話的で深い学び』をどうとらえるか」を考える1年でした。研究推進委員会を中心に話し合いを進め、特に「深い学び」を捉えるに当たっては、「教師が何をしたかではなく、その結果、子どもがどう変わったか、どのような現れがあったかを大切にしたい授業づくりをしていこう」と確認しました。

そして、より主体的、より対話的な環境を構築するために、コの字型隊形や小集団活動に加え、「解決したい課題や問い」「考えを深めたり広げたりする関わり合い」「学びの実感につなげる評価や振り返り」を授業に取り入れた「授業の構造化」を研修の柱にして、職員全員で実践していくことを共通理解しました。

## 承 … 深い学びに導く ICT 活用

ICTの指定を受けている本校では、昨年からICT機器を使って、分かりやすさ、共有しやすさ、時間短縮を行い、「学びのユニバーサルデザイン」を進めてきました。電子黒板や実物投影機を用いて拡大し、分かりやすい説明をしたり、動画や画像で具体を共有しました。加えて今年度は、「深い学び」に導く手立てとしてICT機器を「考えるための材料」として使えないか、研究を重ねました。そして、小集団学習においてタブレットを提供し、資料として、思考ツールとして活用しました。



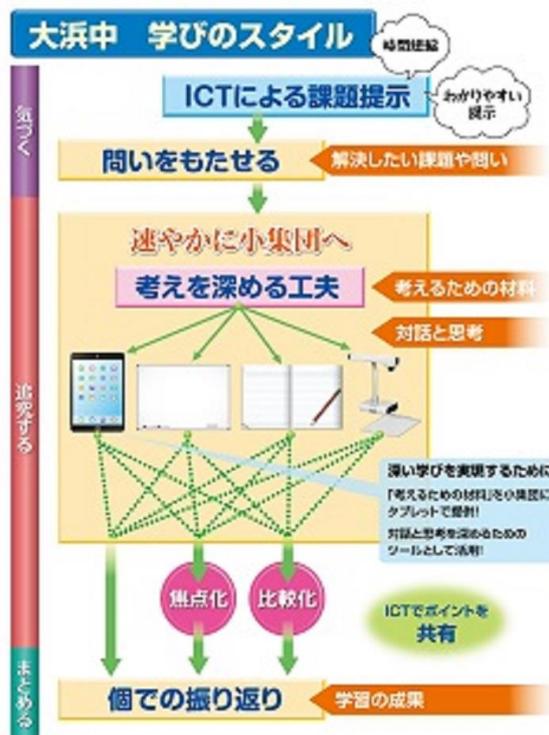
こうして出来上がったのが、「授業の構造化」と「深い学びに導くICT活用」を柱とした「大浜中学びのスタイル」です。

## 転 … 「ケーキをどうやって分ける？」

3年生社会の公民的分野では、「効率と公正」の単元で授業を行いました。4人家族が1つのショートケーキをどのようにわけばいいかを、小集団で生徒に考えさせ、全員が納得するケーキの分け方を考えるためのツールとして、デジタルワークシートを活用することに挑戦しました。ケーキの画像がインストールさ

れているタブレットを用いることで、画像の上から何度も書き直し、授業支援ソフトで生徒の考えを集約することができました。

「大浜中学びのスタイル」は、コの字型隊形、ICTによる分かりやすい課題提示、できるだけ早く小集団にする、その際、考える材料をタブレットで提供する、対話・協働を授業の中心とする、ICTによる焦点化と比較化でポイントを共有する、学びを実感できる個での振り返りを行う、です。



## 結 … 実践の成果

子どもからは、「何度も書き直しできたから、どうすれば公正な分け方になるか繰り返し考えることができた。」  
「電子黒板に各グループの考えが提示されたから比べて考えることができた」といった感想が出ました。

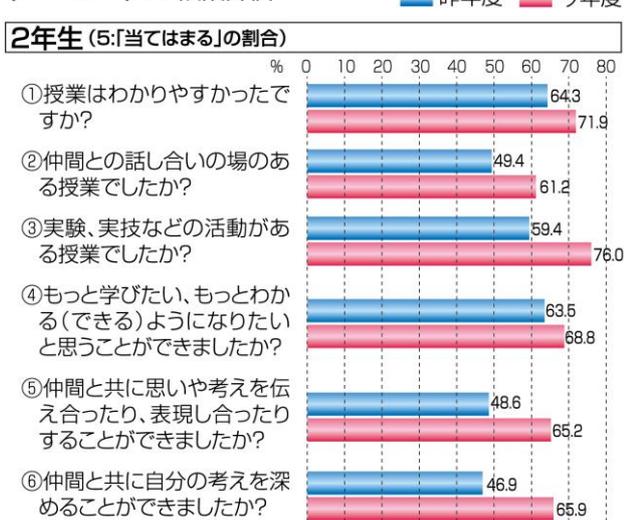
こうした「大浜中学びのスタイル」の実践を積み重ねた結果、分かりやすい授業の実現、対話的・協働的な活動の増加、主体性の向上、考えの深まりの実感といった効果が、アンケートの結果から明らかとなりました。

子どもがどう変わったか、どのような現れがあったかを大切にしながら進めてきたので、それらに関連する数値が向上したことはとても大きな収穫でした。また、全国学力・学習状況調査の結果からも、本校の取組が学力向上につながっていることが分かりました。

今後は、形成的評価の充実、客観的な検証等も取り入れながら、さらなる学力向上に努めていきたいです。

### 生徒による授業アンケート(経年比較)

(5・4・2・1)の4段階評価



# 教室にいるみんなが参加する授業を目指して

大須賀中学校 清水 侑佳

## みんなが参加する授業を目指して

数学は、積み重ねの教科であり、得意や苦手の差が出やすい教科です。よって、教え合いができて、考え合いや発展的な問いまで深めることが非常に難しいです。しかし、目の前にいるどの生徒にも授業に参加してほしい。「わかった」「できた」という経験を増やしてほしいという願いがあります。そこで、次のような工夫をしました。

- ① 学習課題を、生徒の身近なものに関連付けたものにする。
- ② 実験やICTを効果的に取り入れる。

## 学習課題の設定で生徒の授業への参加意欲の向上を狙う

大須賀中学校では毎年10月に悠然祭という名の合唱コンクールが開催されます。合唱コンクールを題材として、単元を計画しました。特に工夫したのは、単元の導入です。小学校第4学年で、生徒たちは「円」の基本を学んでいます。小学校の学習の上に立ち、中学校でも興味・関心を引きつけるにはどうしたら良いかを考えました。学習指導要領によると、「観察、操作や実験などの活動を通して、円周角と中心角の関係を見いだして理解し、それを用いて考察することができるようにする。」とあります。題材が身近なもので、「実際に調べてみる活動を取り入れることで生徒たちの興味・関心が高まるのでは？また、参加したくなるのではないか？」と考え、「どこから撮影するとピッタリ入るのだろう」を学習課題として実践しました。実際の活動を伴うことや合唱コンクールの写真を見せることで、よりイメージがしやすくなり、どの生徒も意欲的に授業に参加することができました。



図1 実際の活動の様子



図2 ドローンでの撮影

## ICTの効果的な活用で生徒の授業への参加意欲の向上を狙う

大須賀中学校は、ICT機器を使用する環境に大変恵まれています。ICT機器は、生徒にとっても身近なものです。それを授業の中で効果的に利用することで、考えが共有しやすくなったり、深まったり、紙と鉛筆だけでは授業に参加できないような生

徒もやる気になってくれるのでは？と考え、授業に取り入れることにしました。取り入れる際に気を付けたことは、ICT機器ありきにならないようにするという事です。授業の「どの場面で、どのように、どんなねらいをもって」利用するのかをよく吟味しました。



図3 タブレットを使って考え合う姿勢のワークシートではなく、タブレット上に書き込むことで、何度も消してやり直しができるようにした。



図4 電子黒板と Xsync を利用し、ワークシートの配付時間の短縮や、生徒の考えを素早く共有することを意識した。



図5 電子黒板をテレビとして利用し、実際の場面を提示することでイメージをしやすくした。

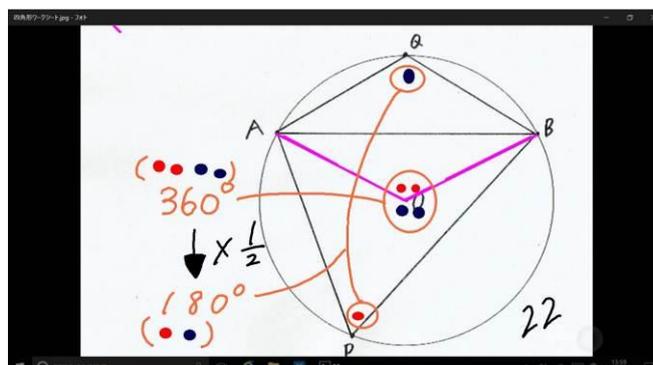


図6 生徒のワークシートの提出は Xsync の提出機能を利用し、紙媒体での提出ではなく、パソコン上へ提出をするようにした。これなら、パソコン上にデータが残り、生徒にも印刷して渡すことができる。

特に、Xsync と電子黒板を利用したことで、生徒の考えを素早く共有することができ、追究する時間を多く設けることができました。数学が苦手な生徒も、自分の手元に考えるためのツールがあること、学習形態が小集団であることから、その生徒なりに授業に参加することができました。

## これからも「みんなが参加する授業を目指して」

ある生徒のワークシートには「自分の予想した所は、円周上から遠く離れていて、この結果に驚いた。また、DVDを撮るカメラマンは、一番後ろから撮っているの、ずっとズームを続けているとうことなのか」という記述がありました。生徒の身近なものを題材とすることで、生徒の興味関心が授業を追い越し、日常へ戻っていったことがわかります。数学は抽象的なものを扱うことが多い教科です。現実世界と数学の世界をつなぐ架け橋の一つが課題設定とICTの利用であると考えます。どの単元でもそれが実現できるように、日々の教材研究は続きます。